

北海道立総合研究機構 北見農業試験場年報

平成27年度

平成28年7月

地方独立行政法人北海道立総合研究機構
農業研究本部 北見農業試験場

目 次

I 概況

1	沿革	-----	1
2	位置	-----	1
3	土壌	-----	1
4	土地面積および利用区分	-----	1
5	機構	-----	2
6	職員	-----	2
7	建物	-----	4
8	新たに設置した主要施設および備品	-----	4
9	決算	-----	5

II 作況

1	気象経過	-----	6
2	当場の作況	-----	8

III 試験研究および地域支援活動の概要

1	研究部の概要	-----	21
	1) 麦類に関する試験	-----	21
	2) 馬鈴しょに関する試験	-----	21
	3) 牧草・飼料作物に関する試験	-----	21
	4) 栽培環境に関する試験	-----	22
	5) 病害虫に関する試験	-----	22
	6) 畑作物および野菜に関する試験	-----	23
	7) 地域支援活動	-----	24
2	技術普及室の活動	-----	24

IV 研究発表および普及事項

1	研究発表		
	1) 研究論文	-----	26
	2) 口頭発表	-----	26
	3) 専門雑誌記事	-----	28
	4) 著編書・資料	-----	28
	5) 新聞記事	-----	29
2	普及事項		
	1) 普及奨励事項	-----	29
	2) 普及推進事項	-----	29
	3) 指導参考事項	-----	29
	4) 研究参考事項	-----	29
3	品種登録・特許申請	-----	30

V 研究企画・場運営・広報活動

1	諸会議	-----	31
2	各種委員会	-----	31
3	刊行印刷物	-----	35
4	広報活動	-----	36
5	見学受入れ	-----	37

VI 技術指導および研修

1	研修生の受入れ	-----	38
2	講師派遣	-----	38
3	職員研修	-----	39
4	職場研修	-----	40
5	国際交流	-----	40

VII その他

1	技術体系化チーム	-----	41
2	オホーツク地域農業支援会議プロジェクトチーム（技術普及室・研究部）	-----	41
3	表彰・受賞	-----	41
4	行事	-----	42
5	自己点検への対応	-----	43
6	建物配置図	-----	44
7	圃場配置図	-----	45

I 概 況

1 沿 革

当場は、明治40年に北海道庁立地方農事試験場北見分場（地方費）として、常呂郡野付牛村（現北見市）に設置された。翌明治41年には、北海道庁立上川農事試験場北見分場となり、さらに明治43年には、第1期北海道拓殖計画の実施に伴って国費に移管され、北海道農事試験場北見支場と改称された。その後、昭和17年には、北海道農業試験場北見支場となり、同19年には組織改正により、北海道農業試験場稚内分場が同北見支場稚内分場と改称され、当場の所管となった。また、昭和22年には、農林省札幌農事改良実験所北見試験地が場内に置かれ、はっか育種を担当した。

昭和25年に、農業試験研究機関の統廃合が行われ、北海道立農業試験場北見支場が設置された。同時に、当場の所管であった稚内分場は廃止され、また、札幌農事改良実験所北見試験地のはっか育種業務も遠軽町に新設された北海道農業試験場所管の試験地に移された。同年から専門技術員が駐在するようになった。また、昭和29年には大麦育種指定試験地の設置が決まり、女満別町（道立農試原々種農場女満別分場跡地）に試験地を置いて大麦育種を実施した。昭和31～34年には、道立農業試験場整備拡充計画の一環として市街化した北見市から現在地へ移転拡充し、昭和33年には大麦育種指定試験地も現在地へ移した。しかし、大麦栽培面積の減少により、昭和36年には小麦育種指定試験に切り替えられた。

昭和39年には、チモシー、スムーズブロムグラス育種のため牧草育種指定試験地が設置された。

昭和39年11月に、道立農業試験場の機構改革により、当支場は北海道立北見農業試験場と改称、1課7科となった。昭和43年には、技術普及部門強化のため専門技術員室が設置され、その後2～3の科名変更や係の統廃合などがあり、平成4年には、管理科および研究各科を主管する研究部長を設置するほか、畑作園芸科を再編し園芸科に、病虫予察科を病虫科にそれぞれ変更した。平成8年3月には、機構改革により水稻試験地を閉所、水稻に関する試験は上川農試に引き継いだ。

平成10年4月に馬鈴しょの耐病性育種を強化するため、馬鈴しょ科（馬鈴しょ育種指定試験地）が根釧農試より移転した。平成12年4月には、「道立農業試験場新研究基本計画」に基づく地域対応強化のため、研究部を作物・生産の2部制とし、専技と技術体系化チームからなる技術普及部を新設した。また、園芸科と作物科を統合し畑作園芸科に、土壌肥料科を栽培環境科に変更した。平成18年4月には、小麦科を麦類科に改称した。また、専門技術員を廃止し、主任普及指導員、主査（地域支援）を設置、総務課会計係を廃止し、主査（会計）を設置した。平成19年に創立100周年を迎え、記念事業を行った。平成22年からは、22の道立試験研究機関を統合して創設した地方独立行政法人北海道立総合研究機構に移行、グループ制を導入した。

2 位 置

当場の住所は、常呂郡訓子府町字弥生52番地で、北見バス訓子府駅停留所から北西へ約4kmの所にある（北緯43° 45'、東経143° 43'、海拔196m）。また旧水稻試験地は、同町若葉町99番地にあり、訓子府駅から西へ約1km（海拔136m）の所にある。

3 土 壌

庁舎周辺の土壌は、黒ボク土あるいは多湿黒ボク土に分類される。台地上の軽石流堆積物やその二次堆積物の上に火山灰が堆積したもので、表層に腐植を多く含み、下層は堅く、排水はやや不良である。旧水稻試験地の土壌は、褐色低地土に分類される。常呂川の河川堆積物からなり、下層土は礫の多い砂土で、排水は比較的良好である。

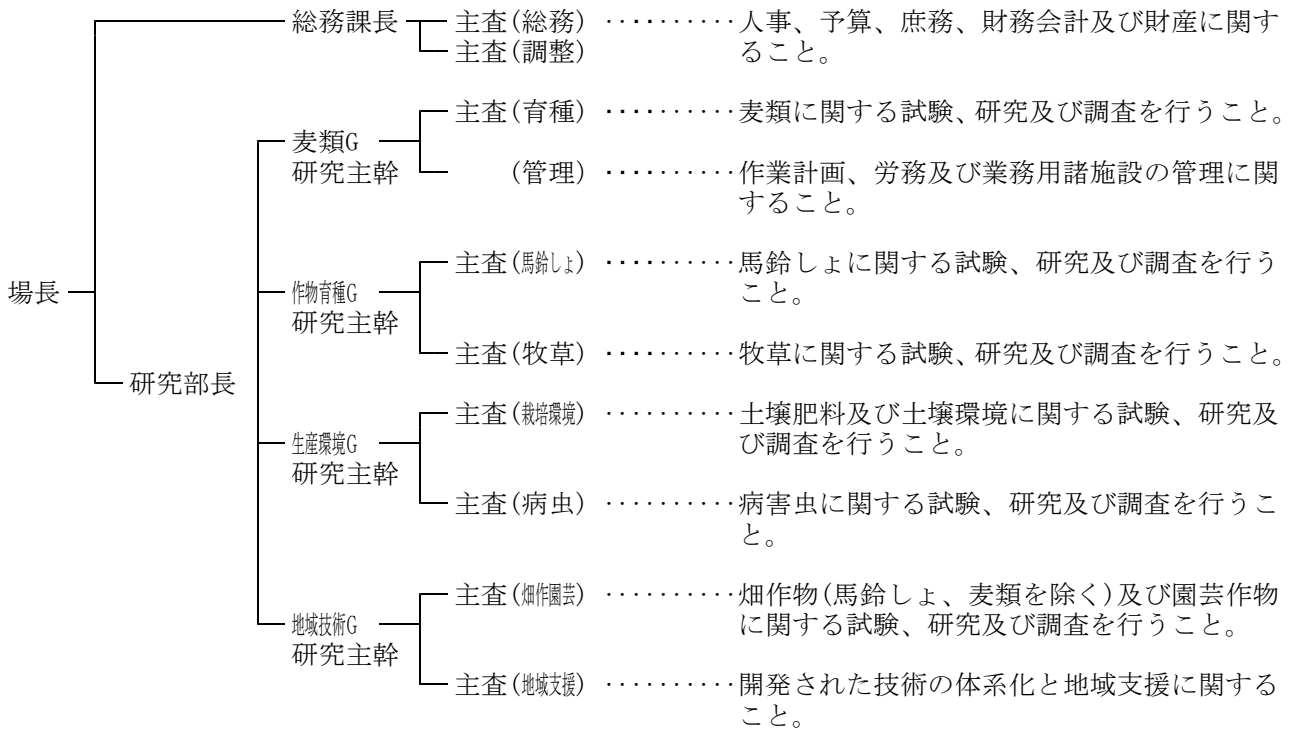
4 土地面積および利用区分

総面積1,557,688㎡

区 分	面 積 (㎡)
庁舎、建物敷地	118,564
公宅用地	44,151 (道財産)
道路、用排水路	42,383
山林	300,400
試験ほ場(畑)	709,705
〃 (隔離ほ場)	73,260
原野、その他	269,225

注) 上記のうち54,985㎡は旧水稻試験地

5 機 構



(道農政部技術普及室)

上席普及指導員 — 主任普及指導員 — 主査(地域支援) …… 普及指導員の指導及び専門技術の調査研究に関すること。

6 職 員

(1) 職員の配置

平成28年3月31日現在

グループ別 区 分	場 長	部 長	研 究 主 幹	麦 類 G		作 物 育 種 G		生 産 環 境 G		地 域 技 術 G		総務課	合 計	技 術 普 及 室
				育 種	管 理	馬 鈴 しょ	牧 草	栽 培 環 境	病 虫	畑 作 園 芸	地 域 支 援			
研究職	1	1	4	6		4	3	3	3	3	1		29	
行政職					4							6	10	3
計	1	1	4	6	4	4	3	3	3	3	1	6	39	3

(2) 平成28年3月31日現在員

職名	身分	氏名	職名	身分	氏名
場長	法人職員	竹中秀行	(作物育種G) 主査(牧草)	法人職員	藤井弘毅
総務課長	北海道職員	村山敏	研究主任	〃	足利和紀
主査(総務)	〃	立山裕之	研究職員	〃	田中常喜
主査(調整)	〃	佐々木賢			
主	〃	中山利彦	(生産環境G)	法人職員	中辻敏朗
〃	〃	稲村浩至	研究主幹	〃	小野寺政行
〃	法人職員	加藤和憲	主査(栽培環境)	〃	木場稔
<研究部>			研究主査	〃	唐星児
部長	法人職員	中津智史	主査(病虫)	〃	小野寺鶴将
(麦類G)			研究主査	〃	池谷美奈子
研究主幹	法人職員	浅山聡	〃	〃	池田幸子
主査(育種)	〃	神野裕信			
研究主任	〃	大西志全	(地域技術G)	法人職員	田中静幸
〃	〃	来嶋正朋	研究主幹	〃	奥山昌隆
〃	〃	粕谷雅志	主査(地域支援)	〃	萩原誠司
研究職員	〃	足利奈奈也	主査(畑作園芸)	〃	池谷聡裕
〃	〃	其田達也	研究主査	〃	杉山
主任師	〃	伊藤幸雄	研究主任		
〃	〃	井口岳人			
〃	〃	樫村優利			
主任	〃	三浦和利	(道技術普及室)	北海道職員	三宅俊秀
(作物育種G)	法人職員	富田謙一	上席普及指導員	〃	馬渕富美子
研究主幹	〃	大波正寿	主任普及指導員	〃	千石由利子
主査(馬鈴しょ)	〃	青山聡	主査(地域支援)		
研究主査	〃	藤田涼			
研究主任	〃	中山輝			
研究職員	〃				

(3) 転入者および採用者

職名	氏名	発令年月日	備考
場長	竹中秀行	27. 4. 1	中央農業試験場から
研究主幹	浅山聡	27. 4. 1	中央農業試験場から
研究主幹	田中静幸	27. 4. 1	花・野菜技術センターから
研究主任	唐星児	27. 4. 1	上川農業試験場から
技師	樫村優	27. 4. 1	新規採用
主査(調整)	佐々木賢	27. 6. 1	上川総合振興局から
(道技術普及室)			
上席普及指導員	三宅俊秀	27. 4. 1	空知普及センターから

(4) 転出者および退職者

職名	氏名	発令年月日	備考
場長	志賀弘行	27. 4. 1	農業研究本部へ
研究主幹	吉村康弘	27. 4. 1	中央農業試験場へ
研究主幹	古川勝弘	27. 4. 1	上川農業試験場へ
主査(病虫)	佐々木純	27. 4. 1	花・野菜技術センターへ
主査(畑作園芸)	柳田大介	27. 4. 1	花・野菜技術センターへ
研究主任	大塚省吾	27. 4. 1	上川農業試験場へ
主任	早坂敏昭	27. 4. 1	十勝農業試験場へ
主査(調整)	中村誠司	27. 6. 1	留萌振興局へ
総務課長	村山敏	28. 3. 31	退職
主任	三浦和利	28. 3. 31	退職

7 建 物

資産名称	建築年月	構造名	延面積(m ²)	備 考
庁舎	S33. 9	ブロック造	1,495.37	
てん菜分析室	S34.10	木造	99.09	
根菜貯蔵庫	S35.12	鉄筋コンクリート造	30.60	
車両庫	S45. 7	鉄骨造	140.66	
第2号ガス貯蔵庫	S46. 6	ブロック造	3.53	
豆類D型ハウス	S53. 3	鉄骨造	233.28	
園芸資材庫	S54. 4	鉄骨造	64.80	
緑体春化施設	S56.10	鉄骨造	232.00	
玉ねぎ貯蔵庫	S57. 9	ブロック造	127.00	
昆虫飼育ガラス・温室	S57.10	鉄骨造	25.92	
管理科事務所	S58.11	木造	172.53	現契約職員詰所
参観人便所	S59. 9	コンクリートブロック造	14.24	
ガラス・網室	S59.12	鉄骨造	116.91	
小農具庫及び農薬庫	S61. 1	ブロック造	136.08	
種子貯蔵庫	S61. 9	ブロック造	59.40	
園芸調査室兼温室	S63.10	コンクリートブロック造	498.96	
農機具格納庫	H 1.10	コンクリートブロック造	728.50	
牧草調査室	H 1.11	木造	243.00	
小麦生育温室	H 2.10	コンクリートブロック造	197.84	
小麦調査室及び病虫調査室	H 2.12	木造	245.52	
土壌肥料調査室	H 3.12	木造	204.00	
普通車庫	H 4. 9	鉄骨造	231.00	
トラクター車庫	H 5. 2	鉄骨造	262.50	
作物調査室	H 5. 9	木造	200.00	
共同作業室	H 5.12	鉄骨造	708.75	
病虫温室	H 7.12	鉄骨造	314.64	
牧草温室	H 8.12	鉄骨造	315.00	
農具庫(馬鈴しょ)	H10. 3	鉄骨造	199.68	
馬鈴しょ育種施設	H10. 3	鉄骨造	676.20	(実験室、温室、網室)
馬鈴しょ育種施設	H10.10	鉄骨造	346.50	(調査室、浴光催芽室)
馬鈴しょ育種施設	H10.10	鉄筋コンクリート造	204.00	(貯蔵庫)
赤カビ検定用採種ハウス1	H11.11	鉄骨造	98.00	
赤カビ検定用採種ハウス2	H11.11	鉄骨造	98.00	
作物温室	H11.12	鉄骨造	305.75	
てん菜育苗施設	H13.11	鉄骨造	216.00	
農業資材庫	H15. 1	鉄骨造	272.16	
貨物車両庫	H16.12	鉄骨造	273.60	
資料保管庫	H27. 3	木造	141.60	
合 計			9,932.61	

8 新たに設置した主要施設および備品

(1) 施 設

該当なし

(2) 備 品

名 称	形 式	金 額 (円)	配 置
パーソナルクレーブ	アルプ KTS-3065A	361,800	生産環境G
ハンドホジナサージェネレーターシャフト	アズワン 10mm径 G-1010	121,500	作物育種G
生物顕微鏡用対物レンズ	オリンパス UPLSAP04X	120,528	生産環境G
ドローン	PHANTOM3 ADVANCED	192,456	生産環境G
マイクロプレートリーダー	サモフィッシャーサイエンティフィック MultiskanFC	896,400	生産環境G
薬用保冷庫	パナソニック MPR-504H-PJ	555,120	生産環境G
施肥機	田端農機具製作所 TJ-4L	704,916	麦 類 G
レーザー体積計	アステックス Selnac-WinVM2100	3,866,400	麦 類 G
電子台秤	寺岡精工 DI-170	362,880	作物育種G
たまねぎ灌水装置	工信 SEM-40WG、ダイライト HLS-2000B	261,480	地域技術G
種子馬鈴薯消毒槽	ノブタ農機 薬液量450L	407,160	作物育種G
豆刈機	和同産業 ワー M1-GS	496,800	地域技術G
乗用モア	オーレック RM83G	496,800	麦 類 G
庁舎正門通路外灯	東芝 LEDK-70927WN-LS1	264,065	総 務 課
除雪作業機	パナソニック XDCC2780KW-KA		
仮設トイレ	スター MSB1780	499,932	麦 類 G
カラープリンタ	日野興業 GX-AKP	496,800	麦 類 G
土ふるい機	キヤノン LBP9510C	181,440	麦 類 G
統計解析ソフト	北海道菱機販売 単相100Vモーター	302,400	作物育種G
野良いもVバネ	Sas Institute Japan JMP12.0.1	270,000	麦 類 G
	北海道クボタ TV-24	496,800	生産環境G

9 決 算 (支出額)

(単位：円)

科 目	予 算 額	支 出 済 額	残 額	備 考
戦 略 研 究 費	300,000	300,000	0	
重 点 研 究 費	8,036,000	7,528,483	507,517	残額は繰越
職 員 研 究 奨 励 費	0	0	0	採択課題無し
経 常 研 究 費	14,134,000	14,133,997	3	
技 術 普 及 指 導 費	222,000	222,000	0	
外 部 資 金 確 保 対 策 費	500,000	500,000	0	
研 究 用 備 品 整 備 費	2,358,504	2,358,504	0	
維 持 管 理 経 費 (研 究)	725,000	725,000	0	
維 持 管 理 経 費 (一 般)	49,055,000	45,489,884	3,565,116	
運 営 経 費	11,326,000	10,565,908	760,092	
共 同 研 究 費	5,500,000	5,500,000	0	
国 庫 受 託 研 究 費	29,811,000	29,806,886	4,114	
道 受 託 研 究 費	6,267,000	6,209,452	57,548	
そ の 他 受 託 研 究 費	65,013,000	64,999,331	13,669	
施 設 整 備 費 補 助 金	1,059,000	1,058,400	600	
施 設 整 備 費 (繰 越 積 立 金)	5,850,000	5,849,280	720	
科 学 研 究 費 補 助 金	1,400,000	1,177,536	222,464	残額は繰越
合 計	201,556,504	196,424,661	5,131,843	

※ 人件費（研究職員費・派遣職員費・準職員費・契約職員費）を除く。

Ⅱ 作 況

1. 気象経過

(1) 融雪期以降の経過

4月：平均気温は上旬が平年よりやや高く、中旬は平年並で、下旬は極めて高かった。月平均気温は6.1℃で平年より高かった(+2.2℃)。降水量は上旬が平年並で、中旬はやや多く、下旬は観測されず、月合計は35.0mmで平年よりやや少なかった。日照時間は上旬が平年よりやや多く、中旬はやや少なく、下旬は多く、月合計は214.6時間で平年よりやや多かった。

5月：平均気温は上旬が平年より極めて高く、中旬はやや高く、下旬は極めて高かった。月平均気温は12.1℃で平年より極めて高かった(+2.5℃)。降水量は上旬が平年より少なく、中旬はやや少なく、下旬は少なく、月合計は36.0mmで平年より少なかった。日照時間は上旬が平年より多く、中旬はやや多く、下旬は多く、月合計は240.9時間で平年より多かった。

6月：平均気温は上旬が平年より低く、中旬はやや高く、下旬は極めて低かった。月平均気温は13.7℃で平年より低かった(-1.9℃)。降水量は上旬が平年より極めて多く、中旬は少なく、下旬は平年並で、月合計は78.0mmで平年並であった。日照時間は上旬が平年よりやや少なく、中旬は多く、下旬は少なく、月合計は144.2時間で平年並であった。

7月：平均気温は上旬が平年より極めて低く、中旬・下旬はともに極めて高かった。月平均気温は20.0℃で平年よりやや高かった(+1.4℃)。降水量は上旬・中旬がともに平年より少なく、下旬はやや少なく、月合計は50.5mmで平年より少なかった。日照時間は上旬が平年よりやや多く、中旬は多く、下旬はやや少なく、月合計は175.8時間で平年並であった。

8月：平均気温は上旬が平年よりやや高く、中旬は低く、下旬は極めて低かった。月平均気温は18.6℃で平年より低かった(-1.8℃)。降水量は上旬が平年よりやや多く、中旬・下旬はともに少なく、月合計は85.0mmで平年よりやや少なかった。日照時間は上旬・中旬がともに平年並で、下旬はやや少なく、月合計は125.8時間で平年並であった。

9月：平均気温は上旬・中旬がともに平年より低く、下旬はやや高かった。月平均気温は19.9℃で平年よりやや低かった(-0.9℃)。降水量は上旬

が平年より少なく、中旬は極めて多く、下旬はやや少なく、月合計は111.5mmで平年並であった。日照時間は上旬・中旬・下旬ともに平年並で、月合計は148.1時間で平年並であった。

10月：平均気温は上旬が平年並で、中旬はやや低く、下旬は低かった。月平均気温は7.7℃で平年よりやや低かった(-1.0℃)。降水量は上旬が平年より多く、中旬・下旬はともに少なく、月合計は66.5mmで平年並であった。日照時間は上旬・中旬がともに平年よりやや多く、下旬は平年並で、月合計は202.8時間で平年よりやや多かった。

11月：平均気温は上旬が平年より低く、中旬はやや高かった。中旬までの平均気温は3.1℃で平年並であった(-0.3℃)。降水量は上旬が平年よりやや少なく、中旬は平年並で、中旬までの合計は36.5mmで平年よりやや少なかった。日照時間は上旬・中旬ともに平年並で、中旬までの合計は79.3時間で平年並であった。

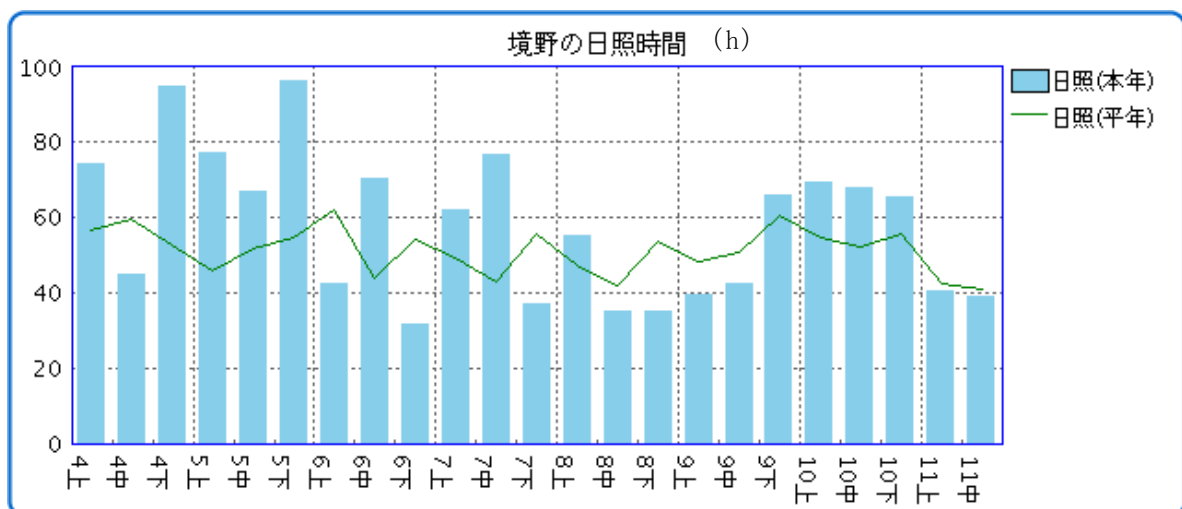
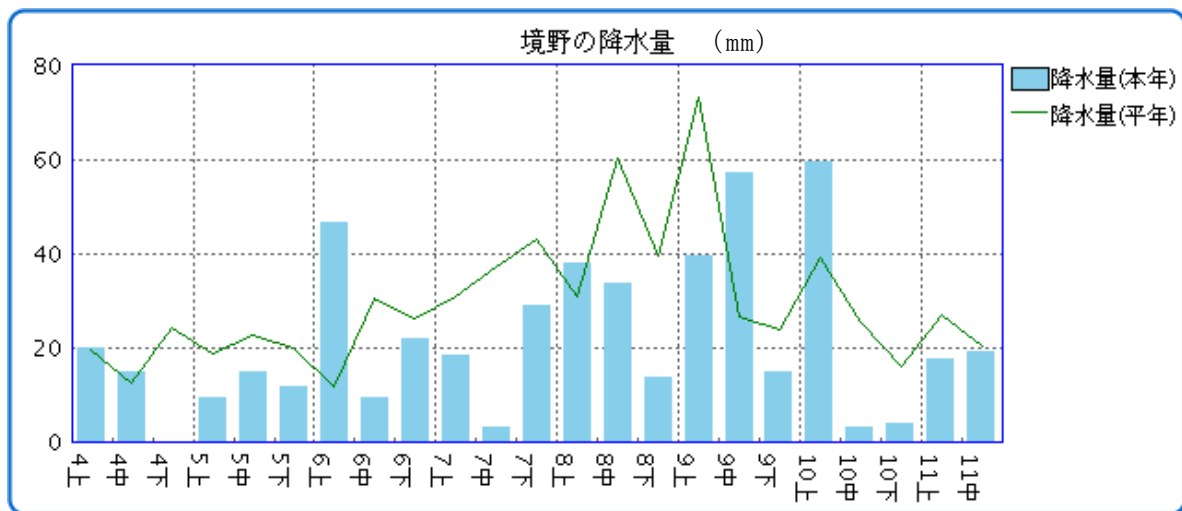
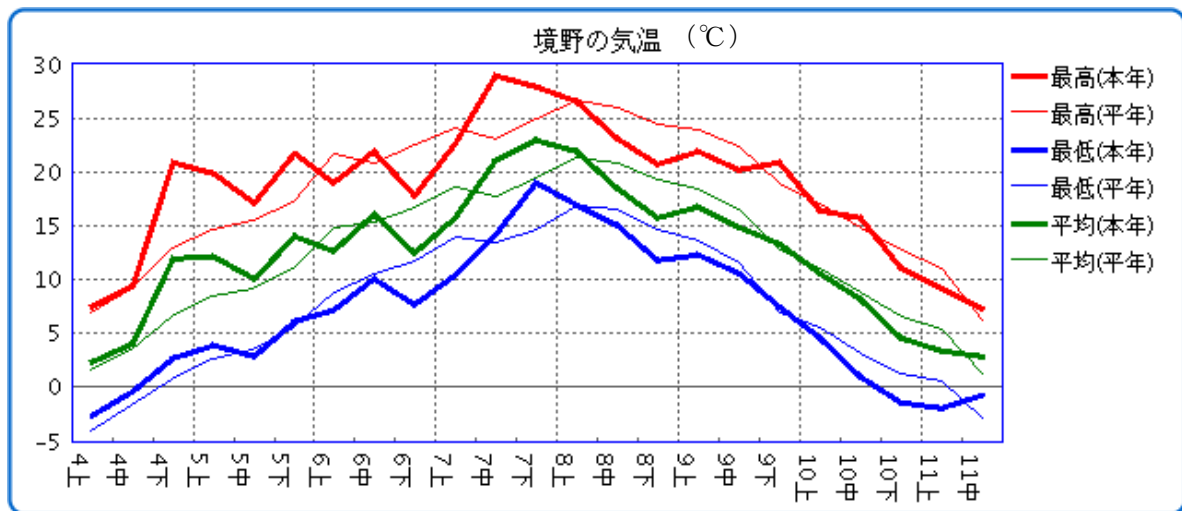
農耕期間中(5月～9月)の気温、降水量及び日照時間の推移を平年と比較すると以下のとおりである。

気温：5月は平年より極めて高く、6月は低く、7月はやや高く、8月は低く、9月はやや低かった。この期間の日平均気温の積算値は2426℃で平年並であった(平年差-29℃、平年比99%)。

降水量：5月は平年より少なく、6月は平年並で、7月は少なく、8月はやや少なく、9月は平年並であった。この期間の降水量の積算は361mmで平年よりやや少なかった(平年差-133mm、平年比73%)。

日照時間：5月は平年より多く、6～9月はいずれも平年並であった。この期間の日照時間の積算は835時間で平年並であった(平年差+71時間、平年比109%)。

(2) 気温、降水量および日照時間の平年との比較



3) 気象表

年月	旬	平均気温(℃)			最高気温(℃)			最低気温(℃)			降水量(mm)			日照時間(hr)		
		本年	10年平均	比較	本年	10年平均	比較	本年	10年平均	比較	本年	10年平均	比較	本年	10年平均	比較
平成27年 4月	上旬	2.4	1.6	0.8	7.4	6.9	0.5	-2.6	-4.0	1.4	20.0	19.6	0.4	74.6	56.7	17.9
	中旬	4.1	3.5	0.6	9.3	9.1	0.2	-0.4	-1.6	1.2	15.0	12.4	2.6	45.1	59.4	-14.3
	下旬	11.9	6.6	5.3	20.9	12.9	8.0	2.7	0.8	1.9	0.0	24.0	-24.0	94.9	52.7	42.2
5月	上旬	12.1	8.4	3.7	19.8	14.6	5.2	3.8	2.7	1.1	9.5	18.7	-9.2	77.4	45.9	31.5
	中旬	10.1	9.2	0.9	17.1	15.5	1.6	2.9	3.5	-0.6	15.0	22.7	-7.7	67.0	51.6	15.4
	下旬	14.0	11.1	2.9	21.8	17.2	4.6	6.1	5.5	0.6	11.5	20.0	-8.5	96.5	54.9	41.6
6月	上旬	12.6	14.9	-2.3	19.0	21.7	-2.7	7.1	8.8	-1.7	46.5	11.4	35.1	42.3	62.2	-19.9
	中旬	16.0	15.3	0.7	21.9	20.9	1.0	10.0	10.6	-0.6	9.5	30.2	-20.7	70.3	43.9	26.4
	下旬	12.4	16.7	-4.3	17.7	22.6	-4.9	7.6	11.8	-4.2	22.0	26.1	-4.1	31.6	54.2	-22.6
7月	上旬	15.8	18.6	-2.8	22.5	24.1	-1.6	10.4	13.9	-3.5	18.5	30.9	-12.4	61.9	49.5	12.4
	中旬	21.0	17.8	3.2	29.0	23.0	6.0	14.1	13.5	0.6	3.0	37.2	-34.2	76.9	42.9	34.0
	下旬	22.9	19.4	3.5	27.9	25.0	2.9	19.0	14.6	4.4	29.0	43.1	-14.1	37.0	55.8	-18.8
8月	上旬	21.9	21.3	0.6	26.5	26.7	-0.2	17.0	16.9	0.1	38.0	30.9	7.1	55.4	47.5	7.9
	中旬	18.4	20.8	-2.4	23.1	26.0	-2.9	15.1	16.6	-1.5	33.5	60.2	-26.7	35.1	42.1	-7.0
	下旬	15.8	19.2	-3.4	20.7	24.5	-3.8	11.8	14.6	-2.8	13.5	39.5	-26.0	35.3	53.7	-18.4
9月	上旬	16.7	18.5	-1.8	21.9	23.9	-2.0	12.2	13.7	-1.5	39.5	73.2	-33.7	39.6	48.1	-8.5
	中旬	14.8	16.6	-1.8	20.2	22.3	-2.1	10.5	11.5	-1.0	57.0	26.4	30.6	42.4	50.6	-8.2
	下旬	13.4	12.8	0.6	20.8	19.0	1.8	7.5	6.9	0.6	15.0	23.7	-8.7	66.1	60.7	5.4
10月	上旬	10.6	11.0	-0.4	16.4	17.1	-0.7	4.5	5.6	-1.1	59.5	39.2	20.3	69.4	54.5	14.9
	中旬	8.2	8.8	-0.6	15.8	14.9	0.9	1.0	3.1	-2.1	3.0	25.3	-22.3	68.0	52.4	15.6
	下旬	4.5	6.6	-2.1	11.0	12.7	-1.7	-1.5	1.3	-2.8	4.0	15.9	-11.9	65.4	55.6	9.8
11月	上旬	3.4	5.4	-2.0	9.2	11.1	-1.9	-1.9	0.5	-2.4	17.5	27.0	-9.5	40.4	42.6	-2.2
	中旬	2.8	1.3	1.5	7.3	6.3	1.0	-0.7	-2.8	2.1	19.0	20.1	-1.1	38.9	40.9	-2.0
		本年	10年平均	比較	本年	10年平均	比較	本年	10年平均	比較	本年	10年平均	比較	本年	10年平均	比較
4月		6.1	3.9	2.2	12.5	9.6	2.9	-0.1	-1.6	1.5	35.0	56.0	-21.0	214.6	168.8	45.8
5月		12.1	9.6	2.5	19.6	15.8	3.8	4.3	4.0	0.3	36.0	61.4	-25.4	240.9	152.4	88.5
6月		13.7	15.6	-1.9	19.5	21.7	-2.2	8.2	10.4	-2.2	78.0	67.7	10.3	144.2	160.3	-16.1
7月		20.0	18.6	1.4	26.5	24.1	2.4	14.6	14.0	0.6	50.5	111.2	-60.7	175.8	148.2	27.6
8月		18.6	20.4	-1.8	23.3	25.7	-2.4	14.5	16.0	-1.5	85.0	130.6	-45.6	125.8	143.3	-17.5
9月		19.9	20.8	-0.9	28.4	28.7	-0.3	12.9	13.4	-0.5	111.5	123.3	-11.8	148.1	159.4	-11.3
10月		7.7	8.7	-1.0	14.3	14.8	-0.5	1.2	3.3	-2.1	66.5	80.4	-13.9	202.8	162.5	40.3
11月(中旬まで)		3.1	3.4	-0.3	8.3	8.7	-0.4	-1.3	-1.2	-0.1	36.5	47.1	-10.6	79.3	83.5	-4.2

注) 観測値は置戸町境野のアメダスによる(てん蔵の定期作況気象情報)。10年平均は前10か年の平均値である。

4) 季節表および農耕期間の平均気温、降水量、日照時間の積算値

年次	初霜 (年.月.日)	根雪始 (年.月.日)	根雪終 (年.月.日)	積雪期間 (日)	降雪終 (年.月.日)	耕鋤始 (年.月.日)	晩霜 (年.月.日)	初霜 (年.月.日)	無霜期間 (日)	降雪始 (年.月.日)
本年	H26.10.16	H26.12.11	H27.4.16	127	H27.4.16	H27.4.30	H27.5.2	H27.10.14	164	H27.10.25
平年	10.11	12.7	4.12	128	5.7	4.28	5.10	10.12	154	11.2
比較	5	4	4	-1	-21	2	-8	2	10	-8

項目	平均気温 (℃)	降水量 (mm)	日照時間 (hr)
5月上旬	本年 2426	361	835
~	平年 2455	494	764
9月下旬	比較 -29	-133	71

注) 農耕期間の積算値は置戸町境野のアメダスにより、それ以外は北見農試観測値である。平年値は前10か年の平均値である。

2 当場の作況

注) 本作況報告は北海道立総合研究機構北見農業試験場の平年値に対する生育良否に基づいたものであり、網走管内全体を代表するものではありません。

1) 秋まき小麦(平成26年9月播種)

作況: 良

事由: 播種は平年並の9月16日に行った。出芽期は平年より1日早い9月24日であった。越

冬前(11月20日)の草丈と茎数は平年より少なかったが、越冬に必要な生育量は確保できていた。根雪始は平年より4日遅い12月11日、融雪期は平年より4日遅い4月16日、根雪期

間は平年より1日間短かった。調査圃場は融雪剤を散布したため、融雪期は14日早い4月2日で、雪腐病の発生は少なかった。

融雪期以降、平均気温が平年より高く経過したため、生育は進み、出穂期は平年より7日早い6月1日であった。6月下旬～7月上旬の平均気温は平年より極めて低かったが、その後は高温となり、成熟期は平年より2日早い7月24日であった。稈長は平年よりやや短く、

穂長、穂数は平年並であった。また、倒伏は発生しなかった。登熟期間が平年より5日長く、7月上・中旬の日照時間が平年より多かったことから、子実の充実は良好であった。リットル重、千粒重ともに平年を上回り、子実重は平年比117%であった。検査等級は1等であった。

以上のことから、本年の作況は「良」である。

調査項目		きたほなみ		
		本年	平年	比較
播種期	(平成26年月.日)	9.16	9.16	0
出芽期	(平成26年月.日)	9.24	9.25	△1
出穂期	(平成27年月.日)	6.1	6.8	△7
成熟期	(平成27年月.日)	7.24	7.26	△2
草丈(cm)	(平成26年11月20日)	15.3	19.0	△3.7
草丈(cm)	(平成27年5月20日)	45.2	39.7	5.5
草丈(cm)	(平成27年6月20日)	93.4	93.8	△0.4
茎数(本/㎡)	(平成26年11月20日)	1057	1342	△285
茎数(本/㎡)	(平成27年5月20日)	1515	1515	0
茎数(本/㎡)	(平成27年6月20日)	764	741	23
稈長(cm)	(成熟期)	82	87	△5
穂長(cm)	(成熟期)	8.3	8.8	△0.5
穂数(本/㎡)	(成熟期)	697	716	△19
子実重(kg/10a)		810	694	116
同上平年比(%)		117	100	17
リットル重(g)		818	794	24
千粒重(g)		44.2	37.2	7.0
品質(検査等級)		1	2	-

注)「きたほなみ」の平年値は前7カ年中、平成22年(最凶)、25年(最豊)を除く5カ年の平均値。

2) 秋まき小麦(平成27年9月播種)

作況: 平年並

事由: 播種は平年より2日遅い9月18日に行った。出芽期は平年並の9月25日で、出芽は良好であった。10月下旬～11月上旬の平均気

温が平年より低かったため、越冬前の草丈と茎数は平年を下回っているが、越冬に必要な生育量は確保できている。

以上のことから、目下の作況は「平年並」である。

調査項目		きたほなみ		
		本年	平年	比較
播種期	(平成27年月.日)	9.18	9.16	2
出芽期	(平成27年月.日)	9.25	9.25	0
草丈(cm)	(平成27年11月20日)	13.4	19.6	△6.2
茎数(本/㎡)	(平成27年11月20日)	1124	1330	△206

注)「きたほなみ」の平年値は前7カ年中、平成22年(最凶)、27年(最豊)を除く5カ年の平均値。

3) 春まき小麦

作 況： 良

事 由：調査圃場は融雪剤散布により4月2日に融雪となったが、4月中旬は降水量がやや多く、播種期は平年より4日遅い4月22日であった。播種後の気温が極めて高く推移したことから、出芽期は平年より2～3日早かった。4月下旬から5月下旬の平均気温が平年より高く推移したため生育は進み、出穂期は平年より4～5日早かった。その後、6月下旬の気温が極めて低かったことから、開花の進みは緩慢

であった。成熟期は平年並から1日遅く、登熟期間は平年より5日長かった。稈長は平年並からやや低く、穂長は平年並で、穂数は平年より多かった。倒伏は発生しなかった。穂数が多く、登熟期間が平年より長かったことから、子実重は平年比121～122%と多収であった。リットル重は平年並で、千粒重は平年並からやや下回った。検査等級は1等であった。

以上のことから、本年の作況は「良」である。

調査項目	春よ恋			はるきりり			
	本年	平年	比較	本年	平年	比較	
播種期 (月.日)	4.22	4.18	4	4.22	4.18	4	
出芽期 (月.日)	5.1	5.3	△ 2	5.1	5.4	△ 3	
出穂期 (月.日)	6.19	6.23	△ 4	6.17	6.22	△ 5	
成熟期 (月.日)	8.5	8.4	1	8.7	8.7	0	
草丈(cm)	(5月20日)	20.7	14.6	6.1	21.7	14.8	6.9
	(6月20日)	70.0	68.0	2.0	72.7	67.5	5.2
茎数(本/m ²)	(5月20日)	733	387	346	680	380	300
	(6月20日)	882	829	53	816	816	△ 0
稈長(cm) (7月20日)	93	94	△ 1	87	92	△ 5	
穂長(cm) (7月20日)	7.9	8.2	△ 0.3	7.4	7.5	△ 0.1	
穂数(本/m ²) (7月20日)	732	543	189	721	564	157	
子実重(kg/10a)	579	478	101	577	472	105	
同上平年比 (%)	121	100	21	122	100	22	
リットル重 (g)	814	805	9	814	809	5	
千粒重 (g)	39.0	39.6	△ 0.6	40.1	42.5	△ 2.4	
品質 (検査等級)	1	1	-	1	1	-	

注) 平年値は前7か年中、平成21年(最凶)、24年(最豊)を除く5か年の平均。

4) とうもろこし (サイレージ用)

作 況：やや不良

事 由：播種期は平年より1日早い5月15日、出芽期は平年より1日早い5月30日であった。本年は、6月下旬から7月上旬にかけて気温が平年より極めて低く推移し、7月20日の草丈が平年を下回ったものの、7月下旬の気温が平年より極めて高かったため、開花期、抽糸期はともに平年より3日早くなった。その後、8月中旬から収穫期にかけては気温が全般に低く推移したため、8月20日の草丈と葉数、9月20

日の稈長は、いずれも平年並となった。本年の収穫期は平年と同日の9月24日であった。収穫時の子実の熟度は黄熟初期と平年並で、総体の乾物率も平年並であった。乾物雌穂重は平年並であったが、乾物茎葉重は平年より少なく、乾物総重ならびに推定TDN収量は、それぞれ平年比93%、95%と平年よりやや少なかった。

以上のことから、本年の作況は「やや不良」である。

調査項目	チベリウス			
	本年	平年	比較	
播種期 (月.日)	5.15	5.16	△1	
出芽期 (月.日)	5.30	5.31	△1	
開花期 (月.日)	8. 1	8. 4	△3	
抽糸期 (月.日)	7.31	8. 3	△3	
収穫期 (月.日)	9.24	9.24	0	
収穫時の熟度	黄熟初期	黄熟初期		
草丈 (cm)	(6月20日)	28.6	30.7	△2.1
	(7月20日)	150.4	174.1	△23.7
	(8月20日)	307.7	310.7	△3.0
稈長 (cm)	(9月20日)	271	277	△6
葉数 (枚)	(6月20日)	4.4	4.7	△0.3
	(7月20日)	12.5	12.3	0.2
	(8月20日)	14.9	14.7	0.2
生総重 (kg/10a)	6337	6699	△362	
乾物茎葉重 (kg/10a)	847	987	△140	
乾物雌穂重 (kg/10a)	1008	998	10	
乾物総重 (kg/10a)	1855	1985	△130	
同上平年比 (%)	93	100	△7	
推定TDN収量 (kg/10a)	1350	1423	△73	
同上平年比 (%)	95	100	△5	
総体の乾物率 (%)	29.3	29.7	△0.4	
乾雌穂重割合 (%)	54.4	50.2	4.2	
有効雌穂割合 (%)	100.0	99.7	0.3	

注1) 平年値は前7か年中、平成23年 (最豊)、25年 (最凶) を除く5か年の平均。

2) 推定TDN収量 = 乾物茎葉重 × 0.582 + 乾物雌穂重 × 0.850。

5) 大豆

作況：不良

事由：平年より1日早い5月22日に播種を行った。播種後の気温が高かったため、出芽期は平年より6日早い5月31日であった。6月上旬から7月上旬まで低温傾向で推移したため、7月までの生育は平年を下回り、開花始は平年より3日遅い7月21日であった。7月中旬から8月上旬までは高温に推移したため、主茎長、

主茎節数とも平年並に回復し、着莢数も平年並となった。8月中旬以降は低温傾向で経過したが、成熟期は平年より1日早い9月24日であった。着莢数は平年並で、一莢内粒数は平年を上回ったが、百粒重が平年を大きく下回ったため、子実重は平年比81%であった。品質は平年並であった。

以上のことから、本年の作況は「不良」である。

調査項目	ユキホマレ			
	本年	平年	比較	
播種期 (月.日)	5.22	5.23	△ 1	
出芽期 (月.日)	5.31	6. 6	△ 6	
開花始 (月.日)	7.21	7.18	3	
成熟期 (月.日)	9.24	9.25	△ 1	
主茎長 (cm)	(6月20日)	12.1	11.3	0.8
	(7月20日)	46.7	55.9	△ 9.2
	(8月20日)	71.7	72.0	△ 0.3
	(9月20日)	72.7	72.6	0.1
	(成熟期)	71.2	72.6	△ 1.4
本葉数 (枚)	(6月20日)	0.9	1.3	△ 0.4
	(7月20日)	7.4	7.5	△ 0.1
主茎節数	(8月20日)	11.5	11.3	0.2
	(9月20日)	11.5	11.3	0.2
	(成熟期)	11.1	11.3	△ 0.2
分枝数 (本/株)	(7月20日)	4.0	4.7	△ 0.7
	(8月20日)	5.5	5.6	△ 0.1
	(9月20日)	5.0	5.4	△ 0.4
	(成熟期)	4.3	5.4	△ 0.9
着莢数 (個/株)	(8月20日)	74.6	76.0	△ 1.4
	(9月20日)	64.7	68.4	△ 3.7
	(成熟期)	68.1	68.4	△ 0.3
一莢内粒数	2.03	1.82	0.21	
子実重 (kg/10a)	311	384	△ 73	
同上平年比 (%)	81	100	△ 19	
百粒重 (g)	28.9	38.1	△ 9.2	
屑粒率 (%)	1.0	1.8	△ 0.8	
品質 (検査等級)	2上	2上	—	

注1) 平年値は、前7か年中21年(最凶)、平成23年(最豊)を除く5か年の平均。

注2) 子実重と百粒重は水分15%換算。

6) 小豆

作況：不良

事由：播種は平年より1日早い5月22日に行った。播種後の気温が高かったため、出芽期は平年より6日早い6月3日であった。6月上旬から7月上旬まで低温傾向で推移したため、7月までの生育は平年を下回り、開花始は平年より「サホロショウズ」で5日遅い7月26日、「エリモショウズ」では4日遅い7月27日であった。7月下旬から8月上旬の高温により、主茎長が急激に伸張して蔓化し、激しい倒伏を生じた。蔓化と倒伏による相互遮蔽および8月中旬以降の低温により、両品種とも着莢数

は平年をかなり下回って推移した。9月以降も低温傾向で推移し、成熟期は平年より「サホロショウズ」で18日遅い9月30日、「エリモショウズ」で22日遅い10月11日であった。両品種とも一莢内粒数および百粒重は平年を上回ったが、着莢数は平年を大きく下回り、子実重は「サホロショウズ」が平年比93%、「エリモショウズ」が同89%であった。品質は「サホロショウズ」で平年をやや上回ったが、「エリモショウズ」では平年を下回った。

以上のことから、本年の作況は「不良」である。

調査項目	サホロショウズ			エリモショウズ			
	本年	平年	比較	本年	平年	比較	
播種期 (月.日)	5.22	5.23	△ 1	5.22	5.23	△ 1	
出芽期 (月.日)	6. 3	6. 9	△ 6	6. 3	6. 9	△ 6	
開花始 (月.日)	7.26	7.21	5	7.27	7.23	4	
成熟期 (月.日)	9.30	9.14	18	10.11	9.19	22	
主茎長 (cm)	(6月20日)	5.1	4.1	1.0	5.1	4.3	1.0
	(7月20日)	12.8	25.0	△12.2	13.5	22.5	△ 9.0
	(8月20日)	103.8	75.0	28.8	92.3	65.0	27.3
	(9月20日)	108.2	84.6	23.6	96.7	70.0	26.7
(成熟期)	117.2	84.6	32.6	96.4	70.0	26.4	
本葉数 (枚)	(6月20日)	0.4	0.8	△ 0.4	0.3	0.7	△ 0.4
	(7月20日)	5.7	7.0	△ 1.3	6.1	7.1	△ 1.0
主茎節数	(8月20日)	13.9	13.2	0.7	14.4	13.7	0.7
	(9月20日)	14.8	13.8	1.0	15.5	14.2	1.3
	(成熟期)	15.1	13.8	1.3	15.4	14.2	1.2
分枝数 (本/株)	(7月20日)	0.3	3.4	△ 3.1	0.3	3.2	△ 2.9
	(8月20日)	3.7	4.8	△ 1.1	2.9	4.5	△ 1.6
	(9月20日)	3.7	4.4	△ 0.7	3.6	4.1	△ 0.5
	(成熟期)	3.4	4.4	△ 1.0	3.8	4.1	△ 0.3
着莢数 (個/株)	(8月20日)	40.0	62.2	△22.2	36.8	66.5	△29.7
	(9月20日)	48.9	61.7	△12.8	51.5	61.0	△9.5
	(成熟期)	45.2	62.4	△17.2	54.9	61.5	△6.6
一莢内粒数	6.52	5.64	0.88	7.09	6.25	0.84	
子実重 (kg/10a)	386	415	△ 29	390	439	△ 49	
同上平年比 (%)	93	100	△ 7	89	100	△ 11	
百粒重 (g)	15.9	15.1	0.8	15.0	14.2	0.9	
屑粒率 (%)	3.5	2.0	1.5	5.5	1.8	3.7	
品質 (検査等級)	3下	4上	—	4中	3下	—	

注1) 平年値は、前7か年中平成24年(最凶)、平成20年(最豊)を除く5か年の平均。

注2) 子実重と百粒重は水分15%換算。

7) 菜豆

作況：不良

事由：播種は平年より1日早い5月22日に行った。播種後の気温が高かったため、出芽期は平年より6日早い6月1日であった。6月上旬から7月上旬まで低温傾向で推移したため、7月までの生育は平年を下回り、開花始は平年より4日遅い7月12日であった。7月中旬から8月上旬までは高温傾向で推移したため、生育は回復し、着莢数は平年並となった。8月中旬

以降は低温傾向となり、成熟期は平年より2日遅い9月5日であった。着莢数は平年を上回ったものの、一莢内粒数は平年を下回り、百粒重も平年を大きく下回ったため、子実重は平年比81%であった。なお、成熟期前後の降雨により色流れ粒が発生し、屑粒率は平年より高く、品質は平年よりやや劣った。

以上のことから、本年の作況は「不良」である。

調査項目	大正金時			
	本年	平年	比較	
播種期 (月.日)	5.22	5.23	△ 1	
出芽期 (月.日)	6. 1	6. 7	△ 6	
開花始 (月.日)	7.12	7. 8	4	
成熟期 (月.日)	9. 5	9. 3	2	
草丈 (cm)	(6月20日)	12.5	9.4	3.1
	(7月20日)	34.9	46.6	△11.7
	(8月20日)	45.3	50.6	△ 5.3
	(9月20日)		51.6	
	(成熟期)	44.1	51.6	△ 7.5
本葉数(枚)	(6月20日)	0.7	0.9	△ 0.2
	(7月20日)	3.6	3.2	0.4
主茎節数	(8月20日)	5.4	5.2	0.2
	(9月20日)		5.2	
	(成熟期)	5.5	5.2	0.3
分枝数(本/株)	(7月20日)	5.7	5.1	0.6
	(8月20日)	4.9	5.5	△ 0.6
	(9月20日)		4.7	
	(成熟期)	5.3	4.7	0.6
着莢数(個/株)	(8月20日)	22.6	21.7	0.9
	(9月20日)		20.0	
	(成熟期)	22.5	20.0	2.5
一莢内粒数	2.67	3.05	△0.38	
子実重(kg/10a)	290	357	△ 67	
同上平年比 (%)	81	100	△ 19	
百粒重 (g)	64.9	74.5	△ 9.6	
屑粒率 (%)	12.4	6.6	5.8	
品質 (検査等級)	3下	3中	—	

注1) 平年値は、前7か年中、平成19年(最凶)、23年(最豊)を除く5か年の平均。

注2) 子実重と百粒重は水分15%換算。

8) ばれいしょ

作 況： 平年並

事 由： 植え付けは平年より2日早い5月11日に行った。5月中～下旬の気温が平年より高かったため、萌芽期は平年より4～5日早かった。6月下旬は低温であったものの萌芽が平年より早かったことから、開花始は平年より1～3日早かった。枯ちよう期は「男爵薯」で平年より1日早い8月31日、「コナフブキ」では平年より12日早い9月24日であった。

「男爵薯」では、上いも重は平年比99%と平年並で、でん粉価も平年並であった。「コナフブキ」では、塊茎の肥大が順調に進んだことから8月20日の上いも重は平年を上回っていたが、枯凋期が早く生育日数が短くなったことにより上いも重は平年並となり、でん粉価も平年並であったため、でん粉重は平年比99%と平年並であった。

以上のことから、本年の作況は「平年並」である。

調査項目		男爵薯			コナフブキ		
		本年	平年	比較	本年	平年	比較
植付期	(月.日)	5.11	5.13	△ 2	5.11	5.13	△ 2
萌芽期	(月.日)	5.31	6. 4	△ 4	5.31	6. 5	△ 5
開花始	(月.日)	6.30	7. 1	△ 1	6.28	7. 1	△ 3
枯ちよう期	(月.日)	8.31	9. 1	△ 1	9.24	10. 6	△ 12
茎長(cm)	(6月20日)	22.9	18.0	4.9	27.3	18.7	8.6
	(7月20日)	46	50	△ 4	65	70	△ 5
	(8月20日)	46	52	△ 6	69	84	△ 15
茎数(本/株)	(6月20日)	3.7	3.8	△0.1	2.9	3.1	△0.2
	(7月20日)	3.8	3.8	0	3.1	3.6	△0.5
	(8月20日)	3.1	3.4	△0.3	3.3	3.4	△0.1
上いも重(kg/10a)	(8月20日)	4360	4416	△ 56	4253	3400	853
	(9月20日)	—	—	—	4932	4725	207
でん粉価(%)	(8月20日)	14.8	15.1	△0.3	20.7	20.6	0.1
	(9月20日)	—	—	—	21.0	21.7	△0.7
でん粉重(kg/10a)	(9月20日)	—	—	—	985	980	5
上いも数(個/株)		10.6	10.8	△0.2	10.7	10.6	0.1
上いも平均重(g)		95	95	0	103	105	△ 2
上いも重(kg/10a)		4496	4549	△ 53	4891	4907	△ 16
同上平年比(%)		99	100	△ 1	100	100	0
でん粉価(%)		14.8	14.7	0.1	21.8	22.0	△0.2
でん粉重(kg/10a)		—	—	—	1017	1029	△12
同上平年比(%)		—	—	—	99	100	△ 1

注) 平年値は前7か年中、平成22年(最凶)、24(最豊)を除く5か年の平均。

9) てんさい

作 況：平年並

事 由：播種は平年より2日早い3月19日に行った。育苗期間中は気温が平年より高めに推移したため、苗の生育は平年より旺盛であった。

移植は平年より1日遅い5月7日に行った。4月下旬から圃場は乾燥傾向にあったが、移植期前後に降雨があったため活着は順調であった。その後、6月中旬までは気温および降水量がおしなべて平年並であったため、生育は順調に進んだ。6月下旬から7月上旬までは、平均気温が平年よ

り極めて低くなり、生育は遅延した。7月中旬から8月上旬までは、平均気温が平年より高く経過し、生育は回復した。8月下旬は気温が平年より極めて低くなり、その後も低温状況が続いたため、生育は鈍化した。一方、根中糖分は低温の影響を受け、順調に上昇した。

収穫は平年より2日早い10月19日に行った。根重は2品種平均で平年対比89%、根中糖分は同109%、糖量は同97%であった。

以上のことから、本年の作況は「平年並」である。

表 その1

調査項目	移植						直播			
	モノホマレ			アーベント			リッカ (参考)			
	本年	平年	比較	本年	平年	比較	本年	平年	比較	
播種期 (月.日)	3.19	3.21	△2	3.19	3.21	△2	5.7	5.4	3	
移植期 (月.日)	5.7	5.6	1	5.7	5.6	1	-	-	-	
出芽期 (月.日)	-	-	-	-	-	-	5.20	5.17	3	
収穫期 (月.日)	10.19	10.20	△1	10.19	10.20	△1	10.19	10.20	△1	
草丈 (cm)	(5月20日)	5.3	4.8	0.5	6.0	4.9	1.1	-	-	-
	(6月20日)	26.9	25.9	1.0	27.7	25.8	1.9	11.0	15.6	△4.6
	(7月20日)	54.2	57.1	△2.9	51.6	53.6	△2.0	41.7	53.4	△11.7
	(8月20日)	60.5	61.8	△1.3	55.6	57.7	△2.1	68.0	61.3	6.7
	(9月20日)	60.8	62.4	△1.6	56.7	58.1	△1.4	64.8	61.6	3.2
生葉数 (枚)	(5月20日)	5.6	4.6	1.0	5.3	4.2	1.1	-	-	-
	(6月20日)	14.7	11.7	3.0	13.2	10.9	2.3	6.5	7.4	△ 0.9
	(7月20日)	19.9	22.1	△2.2	18.8	21.2	△2.4	13.3	16.8	△ 3.5
	(8月20日)	29.7	26.5	3.2	29.7	26.0	3.7	22.0	21.6	0.4
	(9月20日)	30.1	29.9	0.2	29.2	29.8	△0.6	19.5	21.7	△ 2.2
茎葉重 (g/個体)	(6月20日)	110	100	10	100	94	6	6	20	△ 14
	(7月20日)	549	676	△127	506	662	△156	267	483	△ 216
	(8月20日)	905	843	62	891	899	△ 8	860	780	80
	(9月20日)	741	804	△ 63	754	864	△110	749	715	34
根重 (g/個体)	(6月20日)	23	20	3	22	20	2	0	1	△ 1
	(7月20日)	267	269	△ 2	273	286	△ 13	97	160	△ 63
	(8月20日)	743	696	47	750	779	△ 29	515	602	△ 87
	(9月20日)	919	993	△ 74	891	1049	△158	818	926	△ 108
根周 (cm)	(7月20日)	22.0	21.5	0.5	23.0	23.0	0.0	15.6	19.0	△ 3.4
	(8月20日)	31.6	30.3	1.3	32.1	32.9	△0.8	27.8	29.8	△ 2.0
	(9月20日)	33.9	34.8	△0.9	35.0	36.8	△1.8	31.2	34.1	△ 2.9
根中糖分 (%)	(9月20日)	16.62	14.39	2.23	16.52	14.76	1.76	16.46	14.29	2.17

表 その2

調査項目	移植						直播		
	モノホマレ			アーベント			リッカ (参考)		
	本年	平年	比較	本年	平年	比較	本年	平年	比較
茎葉重 (kg/10a) (収穫期)	4439	5305	△866	4938	5538	△600	4724	4231	493
根重 (kg/10a) (収穫期)	6607	7368	△761	6536	7478	△942	6056	6742	△686
同上平年比(%)	90	100	△10	87	100	△13	90	100	△10
根中糖分 (%)	18.66	17.02	1.64	18.92	17.55	1.37	18.84	17.11	1.73
同上平年比(%)	110	100	10	108	100	8	110	100	10
糖量 (kg/10a)	1233	1249	△16	1236	1307	△71	1140	1153	△13
同上平年比(%)	99	100	△1	95	100	△5	99	100	△1

注1) 平年値は前7か年中、平成26年(最豊)、22年(最凶)を除く5か年の平均。

注2) 直播「リッカ」は参考品種、平年値は前5か年の平均。

10) 牧草(チモシー)

作況: 不良

事由: 萌芽期は平年より3日遅い4月26日であった。冬損程度は、雪腐大粒菌核病の発生が認められ、平年よりやや高かった。

1番草; 萌芽期以降5月下旬まで、また6月中旬において、いずれも平均気温が平年より高く推移したため、出穂始は平年より3日早い6月11日、出穂期は平年より4日早い6月15日であった。一方、萌芽期以降5月下旬まで降水量が平年より少なく、干ばつ傾向で推移したことから、草丈が平年より低く、乾物収量は平年比83%と平年より少なかった。

2番草; 7月上~下旬に降水量が平年より少なかったものの、7月中~下旬の気温が高く推移したため、収穫時の節間伸長程度は平年よりやや少なかったが、草丈は同程度で、乾物収量は平年比101%と平年並であった。

3番草; 8月中旬から9月中旬にかけて気温が平年より低く推移したため、草丈が平年より低く、乾物収量は平年比83%と平年より少なかった。

1~3番草の合計乾物収量は、平年比86%と平年より少なかった。

以上のことから、本年の作況は「不良」である。

表 その1

調査項目	ノサップ			
	本年	平年	比較	
萌芽期 (月.日)	4.26	4.23	3	
冬損程度	2.0	1.2	0.8	
被度(%)	(5月18日)	100	100	0
	2番草再生時	100	100	0
出穂始 (月.日)	6.11	6.14	△3	
出穂期 (月.日)	6.15	6.19	△4	
出穂程度 1番草	8.0	7.5	0.5	
節間伸長程度 2番草	2.0	2.9	△0.9	
刈取日(月.日)	1番草	6.18	6.21	△3
	2番草	8.7	8.11	△4
	3番草	10.1	10.5	△4

表 その2

調査項目		ノサップ		
		本年	平年	比較
倒伏程度	1番草	1.0	3.0	△2.0
病害罹病程度	1番草	1.0	1.7	△0.7
	2番草	3.0	3.4	△0.4
	3番草	3.5	3.6	△0.1
草丈(cm)	(5月18日)	29	32	△3
	(6月5日)	59	70	△11
	1番草	91	102	△11
	2番草再生時	38	38	0
	2番草	65	61	4
	3番草再生時	43	45	△2
	3番草	41	45	△4
	生草収量(kg/ 10a)	1番草	2084	2736
2番草		899	882	17
3番草		458	615	△157
合計		3441	4233	△792
乾物率(%)	1番草	23.6	22.3	1.3
	2番草	21.2	22.3	△1.1
	3番草	31.6	28.9	2.7
乾物収量 (kg/10a)	1番草	491	595	△104
	同上平年比(%)	83	100	△17
	2番草	191	190	1
	同上平年比(%)	101	100	1
	3番草	145	174	△29
	同上平年比(%)	83	100	△17
	合計	827	959	△132
	同上平年比(%)	86	100	△14

注1) 平年値は前7か年中、平成21年(最凶)、平成24年(最豊)を除く5か年の平均。

注2) 冬損程度は1:無または微~9:甚。出穂程度および節間伸長程度は、1:無~9:極多。倒伏程度および病害罹病程度は、1:無または微~9:甚。病害は主に斑点病。

11) たまねぎ

作 況：平年並

事 由：播種は、早生種「改良オホーツク1号」では平年より1日遅い3月3日、晩生種「スーパー北もみじ」では平年より1日遅い3月12日に行った。育苗期間中の気温は高めに推移し、苗の生育は概ね順調であった。移植は、「改良オホーツク1号」では平年より6日早く、「スーパー北もみじ」では平年並に行った。移植後から5月下旬まで、降水量が少なかったことから生育は停滞していたが、その後、6月上旬の降雨により徐々に回復し、6月20日における生育は、「改良オホーツク1号」では草丈、生葉数および葉鞘径のいずれも概ね平年並で、「スーパー北もみじ」では草丈および葉鞘径が平年を

やや下回ったものの、生葉数は概ね平年並であった。6月下旬以降、降水量は少なめに推移し、6月下旬から7月上旬の平均気温が極めて低かったため、球肥大は遅れ、7月20日における生育は、両品種とも草丈、生葉数、葉鞘径、葉身生重は概ね平年並であるものの、球生重が平年を下回った。7月下旬以降、気温は高めに推移し、試験ほ場全体に地上部の葉先枯れ症状が若干認められたものの、適度な降雨もあったことから生育は概ね回復した。両品種ともに倒伏期および枯葉期は概ね平年並で、総収量、規格内収量および平均一球重も概ね平年並であった。

以上のことから、本年の作況は「平年並」である。

調査項目	改良オホーツク1号			スーパー北もみじ			
	本年	平年	比較	本年	平年	比較	
播種期 (月.日)	3. 3	3. 2	1	3.12	3.11	1	
出芽期 (月.日)	3.16	3.16	0	3.23	3.23	0	
移植期 (月.日)	5. 1	5. 7	△6	5.12	5.12	0	
球肥大期 (月.日)	7.11	7. 6	5	7.25	7.21	4	
倒伏期 (月.日)	8. 1	7.31	1	8. 8	8. 7	1	
根切日 (月.日)	8.17	8.16	1	8.25	8.27	△2	
枯葉期 (月.日)	8.23	8.21	2	8.31	8.30	1	
収穫期 (月.日)	9. 3	9. 1	2	9. 8	9. 9	△1	
草丈(cm)	移植時	21.5	23.2	△1.7	20.6	22.3	△1.7
	(6月20日)	46.0	43.8	2.2	29.7	32.3	△2.6
	(7月20日)	80.1	78.5	1.6	83.1	81.9	1.2
生葉数(枚)	移植時	3.0	3.1	△0.1	3.1	3.2	△0.1
	(6月20日)	6.6	6.2	0.4	5.9	5.7	0.2
	(7月20日)	9.0	9.2	△0.2	9.8	9.9	△0.1
葉鞘径(mm)	移植時	3.8	3.7	0.1	4.0	4.0	0
	(6月20日)	10.8	11.2	△0.4	7.7	8.8	△1.1
	(7月20日)	20.5	20.8	△0.3	20.5	20.9	△0.4
葉身生重(g)	(7月20日)	123.5	129.9	△6.4	131.2	136.7	△5.5
球生重(g)	(7月20日)	85.0	120.8	△35.8	42.8	68.1	△25.3
	(8月20日)	258.1	259.2	△1.1	209.9	220.1	△10.2
総収量(kg/10a)		7228	7161	67	6495	6063	432
規格内収量(kg/10a)		5972	6312	△340	5623	5504	119
同上平年比(%)		95	100	△5	102	100	2
規格内率(%)		83	88	△5	87	91	△4
平均一球重(g)		240	247	△7	211	212	△1

注) 平年値は前8か年中、平成19年(最豊)、20年(暴風雨被害により成績を参考扱いとしたもの)、25年(最凶)を除く5か年の平均。

付表1 各作物の耕種概要

作物名	一区面積 (m ²)	反復	前作物	畦幅 (cm)	株間 (cm)	一株本数	播種粒数 (粒/m ²)	播種量 (kg/10a)	株数 (株/10a)
1. 秋まき小麦	7.2	4	緑肥大豆	30.0	条播	-	255	-	-
2. 春まき小麦	6.0	4	緑肥大豆	30.0	条播	-	340	-	-
3. とうもろこし	11.2	3	緑肥えん麦	75.0	17.8	1	-	-	7,491
4. 大豆	9.6	3	緑肥そば	60.0	20.0	2	-	-	8,333
5. 小豆	9.6	3	緑肥そば	60.0	20.0	2	-	-	8,333
6. 菜豆	9.6	3	緑肥そば	60.0	20.0	2	-	-	8,333
7. ばれいしょ	37.8	3	緑肥えん麦	75.0	30.0	1	-	-	4,444
8. てんさい	39.6	3	緑肥野生えん麦	60.0	23.8	1	-	-	7,003
9. 牧草 (チモシー)	2.7	4	緑肥えん麦	30.0	条播	-	-	2.0	-
10. たまねぎ	10.0	2	たまねぎ	30.0	10.5	1	-	-	31,750

付表2 各作物の耕種概要

作物名	施肥量 (kg/10a)						備考
	N	P ₂ O ₅	K ₂ O	MgO	堆肥	その他	
1. 秋まき小麦	6.0	20.0	9.7	3.8		起生期追肥 N:3.0	H27年より変更
2. 春まき小麦	10.0	18.0	12.0	5.0			
3. とうもろこし	14.0	22.0	12.0	4.0	3,000	炭カル:150	
4. 大豆	1.8	15.0	7.8	3.0			
5. 小豆	4.0	20.0	11.2	4.0			
6. 菜豆	4.0	20.0	11.2	4.0			
7. ばれいしょ	8.0	20.0	14.0	5.0			
8. てんさい	15.4	30.8	12.6	7.0			
9. 牧草 (チモシー)	15.0	15.0	15.0	2.3			
10. たまねぎ	15.0	30.0	9.0	4.5			

Ⅲ 試験研究および地域支援活動の概要

1 研究部の概要

1) 麦類に関する試験

麦類グループ（育種）は、秋まき小麦および春まき小麦の新品種育成やそれに係わる栽培試験、二条大麦の適応性検定試験および除草剤などの資材試験を実施している。

小麦では、「小麦品種開発事業」、「農林水産業・食品産業科学技術研究推進事業（課題番号26097C）」、「道産小麦の需要を拡大する次世代品種の開発と生産安定化」等の各試験研究課題により高品質で耐病性および穂発芽耐性に優れた品種の育成を進めている。「奨励品種決定調査」では秋まき小麦の「北見91号」および「北見92号」、春まき小麦では「北見春77号」を供試し、「北見92号」を継続検討、他の2系統を廃棄とした。秋まき小麦「北見93号」、春まき小麦「北見春78号」および「北見春79号」を新配付系統とした。「春まき小麦の品種選定試験」ではホクレン農総研育成の「HW6号」など6系統について適応性を検討した。

二条大麦では、「二条大麦の品種選定試験」により適応性検定試験を行い「札育3号」および「札育4号」の農業特性が対照品種と比較してやや劣ることを明らかにした。

2) 馬鈴しょに関する試験

作物育種グループ（馬鈴しょ）は、でん粉原料用、油加工用等の新品種育成並びに栽培試験を実施している。

ばれいしょ新品種育成に関する試験は、「農林水産業・食品産業科学技術研究推進事業 実需者ニーズに対応した病害虫抵抗性で安定生産可能なバレイショ品種の育成」、「多様な育種目標に対応した品種開発のための検定強化」、「馬鈴しょ品種開発事業」、「でん粉原料用馬鈴しょにおける多収品種の開発強化」の各試験研究課題により、安定多収な品種の育成を進めている。また、「でん粉原料用馬鈴しょにおける低離水率・低リン含量系統の選抜強化」、「長期貯蔵性に優れたポテトチップ用馬鈴しょ品種の開発強化」により、でん粉品質並びに油加工適性の優れた品種の

開発促進を行っている。さらに、「DNAマーカーによる馬鈴しょ耐病虫性品種の開発強化」、「初期世代からのそうか病抵抗性馬鈴しょ系統の選抜強化」、「初期世代からの馬鈴しょ疫病抵抗性系統の選抜強化」の各試験研究課題により、耐病虫性（ジャガイモシストセンチュウ、そうか病、疫病、Yウイルス病）に優れた品種の開発促進を進めている。

「奨励品種決定調査」では、油加工用「北育22号」、でん粉原料用「北育23号」「北育25号」および業務加工用「北育24号」について検討し、いずれも継続検討とした。「馬鈴しょ輸入品種等選定試験」では、ホクレン農総研およびカルビーポテト育成の3系統について生産力検定並びに病害虫抵抗性検定を行い、「HP07（コナヒメ）」が北海道優良品種に認定された。「馬鈴しょ「北育20号（コナユタカ）」の安定多収栽培法確立と現地実証」では、場内圃場および現地圃場において、「コナユタカ」の安定多収栽培のための栽植様式および施肥法、機械収穫適性等について検討した。

3) 牧草・飼料作物に関する試験

作物育種グループ（牧草）では、チモシー新品種育成試験、牧草・飼料作物の系統評価、品種比較試験、栽培試験ならびに除草剤などの資材試験を実施している。

「チモシー品種開発事業」では、収量性、競合力、耐倒伏性、飼料成分、耐病性などの改良を目標として、チモシー有望系統の開発に取り組んでいる。「農林水産業・食品産業科学技術研究推進事業、北海道草地の植生を改善し高品質粗飼料生産を可能とする牧草品種の育成」では、極早生の有望系統「北見32号」、「北見33号」の系統適応性検定試験及び特性検定試験を実施し、播種年の生育・収量を明らかにした。また、北海道農業研究センターが育成したフェストロリウム2系統とガレガ2系統、サイレージ用とうもろこし2系統のオホーツク地域での適応性検定試験を実施した。ホクレンとの共同研究「良質安定多収に貢献する高TDNチモシー品種の開発促進」

では、チモシーの中生及び早生の育成系統の生産力検定試験と極早生育成系統の採種試験を実施した。民間受託試験「飼料作物品種比較試験」では、牧草4草種とサイレージ用とうもろこしの品種比較試験を実施した。そのほか、「科学研究費助成事業、牧草への家畜育種法-BLUP法-の応用」では、BLUP法のチモシー育種への適用性を検討している。また、「高精度播種に対応したチモシー主体草地の安定造成播種量の設定」では、チモシーの高精度播種時の新たな播種量基準の設定に、「多様な地域・用途に対応した飼料用とうもろこし安定栽培マップの作成」ではサイレージ用とうもろこしの用途別の安定栽培マップの開発に取り組んでいる。

4) 栽培環境に関する試験

生産環境グループ(栽培環境)は、土壤肥料(資材試験を含む)および環境保全に関する研究を実施するとともに、技術体系化チームへの対応を分担している。

本年度は、本年度終了課題「移植たまねぎの安定生産のための窒素分施肥技術の確立」を「移植たまねぎ安定生産のための窒素分施肥技術」(北見農試、中央農試)として取りまとめて北海道農業試験会議(成績会議)に提出し、平成28年普及推進事項に採択された。

継続課題としては、「環境保全型有機質資源施用基準設定調査」(中央農試、上川農試、道南農試、十勝農試、根釧農試と共同)、「農地土壤炭素貯留等基礎調査事業」(中央農試、上川農試、道南農試、十勝農試、根釧農試と共同)、「道産小麦の需要を拡大する次世代品種の開発促進と生産安定化 1)パン・中華めん用小麦の開発促進と普及支援 (4)硬質秋まき小麦『つるきち』の生育特性に対応した栽培法の確立」(地域技術G、中央農試、十勝農試と共同)、「新たな品種および栽培法に対応した飼料用とうもろこしの窒素施肥法の確立」(根釧農試と共同)、「道東地域の秋まき小麦に対する肥効調節型肥料を用いた追肥省略技術の確立」、「オホーツク地域における客土材の土壤分析」、「農作物病虫害診断試験②生理障害診断試験」、「道営農業農村整備事業等に係る土壤調査」(中央農試、上川農試、道南農試、十勝農試、根釧農試、花

野センターと共同)を実施した。

本年度から新たに実施した課題は、「土壤凍結深制御技術を応用した畑地の理化学性改善による生産性向上」(十勝農試、北農研と共同)、「土壤凍結深制御法としての雪踏みの特性と活用法」、「畑作物に対する苦土質肥料『軽焼マグネシウム』の肥効評価」(十勝農試と共同)である。

5) 病虫害に関する試験

生産環境グループ(病虫)は、畑作物および園芸作物の病虫害防除対策、診断試験、殺虫・殺菌剤の資材試験、さらに予察調査を実施するとともに、技術体系化チームへの対応を行っている。

本年度は、本年度終了課題「道産小麦の需要を拡大する次世代品種の開発促進と生産安定化 2.日本めん用等小麦の開発促進と生産安定化 3) *Microdochium nivale*による小麦の赤かび病と葉枯症状の発生に対する防除対策」を「*Microdochium nivale*による秋まき小麦の赤かび病と葉枯症の防除対策」として、また昨年度終了課題「たまねぎ突発性病害の灰色腐敗病およびべと病に対する効率的防除体系確立」のうち灰色腐敗病に関する成果を「たまねぎの灰色腐敗病に対する多発回避のための効率的防除対策」(北見農試、花野センター)として、同じく昨年度終了課題「ジャガイモシストセンチュウの根絶を目指した防除技術の開発と防除モデルの策定」を「ジャガイモシストセンチュウ発生ほ場における密度推定のための省力的な土壤サンプリング法」としてとりまとめて北海道農業試験会議(成績会議)に提出し、いずれも平成28年指導参考事項に採択された。

継続課題としては、「ムギ類変異集団の作出と利用」(麦類Gと共同)、「病虫害発生予察調査」(中央農試、上川農試、道南農試、十勝農試、花野センターと共同)、「馬鈴しょ輸入品種等選定試験」(そうか病、塊茎腐敗およびジャガイモシストセンチュウ抵抗性検定。作物育種G、中央農試、上川農試、十勝農試、道南農試と共同)、「実需者ニーズに対応した病虫害抵抗性で安定生産可能なバレイショ品種の育成」(そうか病、塊茎腐敗およびジャガイモシストセンチュウ抵抗性検

定。作物育種G、中央農試と共同)、「防除薬剤の残効期間と品種の抵抗性に対応したテンサイ褐斑病の防除」(地域技術Gと共同)、「初期世代からの馬鈴しょ疫病抵抗性系統の選抜強化」(作物育種G、十勝農試と共同)を実施した。

本年度から新たに実施した課題は、「ジャガイモシストセンチュウ抵抗性育種素材の簡易検定法の改良」、「ジャガイモシロシストセンチュウの防除技術の開発 1. ジャガイモシロシストセンチュウの迅速・簡易診断法の開発 (3)カップ法を応用した簡易検診法の開発」、「タマネギ小菌核病の気象情報による発生予測に基づいた効率的防除対策」である。

新資材試験では、殺菌剤5剤が北海道農業試験会議(成績会議)において指導参考事項に採択された。

6) 畑作物および野菜に関する試験

地域技術グループ(畑作園芸)は豆類およびてん菜などの畑作物および野菜類の新品種育成・栽培法改善試験、除草剤などの資材試験を実施している。

豆類では、大豆系統適応性検定試験として「地域適応性検定試験」で網走現地圃場において十系系統の適応性の検定を行った。「奨励品種決定基本調査」で大豆の十育系統2系統、「地域適応性検定試験」で小豆の十育系統2系統、菜豆の十育系統6系統の検定を行った。「新優良品種普及促進事業」では、小豆の十育系統1系統、菜豆の十育系統1系統の種子増殖を行った。公募型研究では網走現地圃場などにおいて、大豆では「ダイズ裂開粒の発生機構解明および裂開抵抗性マーカーの開発」、小豆では「オホーツク地域に適した早生耐冷性小豆品種育成のための生育特性解明と選抜強化」として、中期～後期世代系統の適応性などの検定を行った。花豆では、「花豆の高品質省力化に向けた収穫・栽培法の検討」で、品種比較、施肥試験、紫花豆の栽植密度試験を行ったほか、北見市留辺蘂町・置戸町現地試験では、白花豆の栽植密度試験、省力化に関する試験(手竹位置試験、根切りにおけるアシストスーツ試験など)、機械収穫に関する試験等を行った。

てんさいの品種選定では、「てん菜輸入品種検定試験」として民間育成の9系統、「気候変動に対応したテンサイの安定生産を可能にする高度病害抵抗性品種の開発」として、北農研育成の2系統を検定した。民間育成系統「KWS 2K314」が北海道優良品種に認定された。その他の輸入系統は継続検討が4系統、廃棄が4系統である。北農研系統では、継続が1系統、廃棄が1系統である。そう根病抵抗性検定圃場では、かなり鹿の食害を受けたが、抵抗性判定に及ぼす影響は少なかった。また、平年より気温が低い時期が多かったため、そう根病の病徴の進展が1月ほど遅れた。

てんさい病害に対する試験では、「防除薬剤の残効期間と品種の抵抗性に対応したテンサイ褐斑病の防除」として、てんさい品種の抵抗性の差異と防除薬剤の残効期間を組み合わせ、防除開始時期の検討を行った。平成27年度の防除薬剤の残効はやや長く2週間程度であった。品種の褐斑病抵抗性を加味した薬剤の残効期間の差はみられなかった。また、防除開始時期は本年も予防防除および初発直後防除が効果的であった。

たまねぎ品種開発では、「加工業務用たまねぎ系統の特性検定試験」で、共同育成した「北見交65号」、「北見交68号」の生産力検定試験、特性検定試験及び地域適応性検定試験を行った。「北見交65号」は北海道優良品種に認定された。「タマネギ育成系統特性評価試験」では北農研育成「月交25号」の特性を検討した。「たまねぎ有望系統の特性検定試験」では、民間育成有望系統30系統の特性を調査した。重点研究「たまねぎ新品種「ゆめせんか」の加工特性解明と高品質安定生産技術確立による需要促進」では、北見農試育成品種「ゆめせんか」の品質特性を詳しく調査するとともに、球肥大を目指した栽培技術に関する研究を行った。また、「たまねぎ直播栽培における収量安定化方策の検討」では、収量安定化のため、収穫球数確保の重要性を示し、平成24年指導参考事項による栽培体系を改訂した。

新資材試験は、場内でてんさい除草剤1剤、現地でハッカ除草剤1剤を検討した。

7) 地域支援活動

①技術体系化チーム活動

「道産小麦の需要を拡大する次世代品種の開発促進と生産安定化 1) パン・中華めん用小麦の開発促進と生産安定化 (4) 硬質秋まき小麦「つるきち」の生育特性に対応した栽培法の確立」(受託試験)では、現地における硬質秋まき小麦「つるきち」の生育特性に対応した窒素施肥法を検討した。「革新的技術導入による地域支援—たまねぎ高畦移植栽培技術による湿害回避効果の実証—」(経常)では、管内4ほ場で実証栽培し、高畦移植による湿害回避効果および生育への影響を検討した。

②地域支援活動

オホーツク地域農業支援会議では、当年度は該当するプロジェクト課題はなかった。各地域ニーズ課題について、技術普及室、網走農業改良普及センター、関係農協・生産者およびオホーツク総合振興局とともに対応した。

2 技術普及室の活動

a 専門項目に関する普及センターの支援

技術的な問い合わせなどへの対応の他、普及センターからの支援要請に基づいたテーマについて対応した。

畑作の支援テーマは、①ロボット技術導入実証事業に係る技術支援、②でん粉原料用ばれいしょにおける、安定多収栽培技術の確立、③ジャガイモシストセンチュウのカップ検診法の高度化・効率化、④効率的な農業機械の運用に向けての検討⑤生育センサを活用した可変施肥システムの普及推進、⑥でん粉原料用ばれいしょ「コナフブキ」の生育診断を活用した窒素追肥法の確立、⑦ばれいしょ施肥管理による増収技術の検討、⑧リモートセンシングを活用した秋まき小麦「きたほなみ」止葉期追肥技術の検討、⑨欠株センサ付きばれいしょプランタの有効性検証について、⑩根室管内における麦類栽培の定着に向けた栽培支援である。

園芸では、①たまねぎのリン酸減肥技術の現地実証、②いちご(リレー苗)の炭そ病診断に向けた技術支援、③センキュウの有効な灌水技術およびべと病の効果的防除法、④ネ

ギハモグリバエの発生予察に係わる予察手法と同定方法の習得、⑤たまねぎ色ムラ(色ぬけ)症状の要因解析と対策⑥たまねぎのネギハモグリバエの調査方法と対応策、⑦病害虫被害の抑制による収量の確保に対する支援である。

また、各専門部会研修、地域課題解決研修、各担当者会議に対して支援した。さらに、害虫や自然災害等の緊急事態に対する対応や突発性病害、生理障害の診断および研究要望事項のうちで既往の成果があるとされたものに対する支援など多岐にわたる。

b 調査研究の実施

調査研究は3課題である。1つ目は、硬質秋まき小麦「つるきち」の高品質安定栽培法確立で、北見市常呂、大空町女満別、美幌町での実証結果を現地に情報提供した。窒素施肥試験：合計窒素施肥量が24kg/10aまでの範囲において、施肥量の増加に従い子実重及び子実蛋白が高まる傾向であった。

播種期試験では、標準区に比べ晩播区(9/25は種)は、97%とやや低収となった。適期は種(有効積算温度470℃以上)の時に概ね目標茎数の1,100本/m²を確保できると見込まれた。

2つ目は、RTK-GPSやICTを活用した先進農業技術が導入されている事例があることから、事例収集し、試験場等の新たな知見を加えてセミナー等を開催し情報発信を行った。

「携帯型NDVIセンサによる秋まき小麦「きたほなみ」の生育診断に向けた茎数推定法」に基づき、起生期の現地実証を行った。携帯型NDVIセンサは、リアルタイムで作物生育を数値化することで現場の営農指導に活用できる。RTK-GPSによる自動操舵装置及び収量センサが装備されたコンバインの収量センサ値の精度及び収穫能率向上効果を確認した。

3つ目は、オホーツク地区におけるたまねぎのネギハモグリバエの発生調査と実態確認で、普及センター園芸部会および北見地区玉ねぎ病害虫対策会議の取り組みに対して支援を行った。

園芸部会では、①技術普及課から提供された道内発生状況・農薬登録拡大の伝達、②農業試験場の研究経過の伝達、③成虫と蛹の標本作成・配布、④寄生された鱗茎を用いて症

状確認の目ならし、④診断業務と対策助言を行った。

北見地区玉ねぎ病害虫対策会議では、①農業試験場の研究結果の伝達、②ハモグリバエ類の生態・見分け方、③予察支援と診断、④資料原稿作成に係る支援を行った。

普及室で予察を実施したほ場は、ナモグリバエとマメハモグリバエの発生は確認できたものの、ネギハモグリバエは未発生であった。

管内の30件の問い合わせや診断依頼の内、2件がネギハモグリバエ、28件は異なった。なお、収穫後の鱗茎からもネギハモグリバエの被害は確認されていない。オホーツクでは、蛹が露地越冬しているかは未確認である。

c 地域農業支援会議活動

オホーツク地域農業支援会議プロジェクトとしての取組はなかった。

d 農業試験場における普及指導員の研修実施

高度専門技術研修（畑作）を6月23日から26日までの4日間の日程で実施した。

普及指導員経験5～15年未満の中堅普及指導員2名の参加で、研究部各グループの協力により対応した。

e 農業協同組合等の営農指導機能強化の支援

J A 営農指導員研修（耕種部門）は、7月8日、9月15日に実施した。北見農試技術普及室が担当した項目は、「農薬・病害虫防除の基礎知識」、「GPS・GISの基礎知識」である。

IV 研究発表および普及事項

1 研究発表

1) 研究論文

- 中津智史・濱村美由紀・中本 洋・甲田裕幸・飯田憲司・相馬 潤. 道央地域における子実用とうもろこしの栽培法(第1報)品種の早晩性が生育, 収量, 子実水分等に及ぼす影響. 北農 82(2):159-168(2015).
- 中津智史・濱村美由紀・中本 洋・甲田裕幸. 道央地域における子実用とうもろこしの栽培法(第2報)無機養分の吸収推移と窒素施肥法. 北農 82(3):267-273(2015).
- 中津智史・濱村美由紀・中本 洋・甲田裕幸・相馬 潤. 道央地域における子実用とうもろこしの栽培法(第3報)栽植密度が子実収量・水分・倒伏に及ぼす影響. 北農 82(4):364-369(2015).
- Kazunori Ashikaga, Tsuneki Tanaka, Hiroki Fujii, Hiroyuki Tamaki, Koichi Sato. Simultaneous selection for nutritive value and agronomic traits in timothy (*Phleum pratense* L.). *Euphytica* 208:237-250(2016).
- 足利和紀・藤井弘毅・田中常喜・吉澤 晃・佐藤公一・玉置宏之. チモシー採草用中生の早の新品種「北見30号」の育成とその特性. 北海道畜産草地学会報 3:143(2015).
- 足利和紀・藤井弘毅・田中常喜. チモシーの倒伏が飼料品質に及ぼす影響. 北海道畜産草地学会報 3:144(2015).
- 小野寺政行・新谷竜太郎・田隈篤夫・中辻敏朗. 遠紋地域における飼料用とうもろこし畑の生産障害要因と土壌・肥培管理法. 北農 82:375-384(2015).
- 笛木伸彦・中村隆一・沢口敦史・渡部敢・鈴木剛・内田哲嗣・小野寺政行. 追肥窒素時期の違いが秋まき小麦「きたほなみ」の穂数・子実収量・子実タンパクおよび施肥窒素利用率に及ぼす影響. 北海道立総合研究機構農業試験場集報 99:61-72(2015).
- 田村 元・中津 智史・竹内 晴信・加藤 淳. 北海道における有機栽培ばれいしょの安定生産技術2. 有機質肥料の施肥方法. 北農 82(3):274-278(2015)
- Ikeda S, Hoshino T, Matsumoto N, Kondo N. Taxonomic reappraisal of *Typhula variabilis*, *Typhula laschii*, *Typhula intermedia*, and *Typhula japonica*. *Mycoscience* 56:549-559(2015).
- 黒崎英樹・唐 星児・小野寺政行・竹内徹. 北海道北見地域における虎豆の栽培技術—省力化を目的とした栽植密度の改善. 日本作物学会記事 85:33-40(2016).
- 阿部珠代・柳原哲司・杉川陽一・菅原章人・須田達也・高松 聡・井上哲也・唐 星児. 超強力コムギ「ゆめちから」の子実タンパク質含有率ならびに「きたほなみ」とのブレンド割合がパン加工適正に及ぼす影響. 日本作物学会記事 85:41-50(2016).

2) 口頭発表

- 神野裕信. 穂発芽耐性に優れる小麦品種の開発と今後の方向. 第19回穂発芽研究会 ミニシンポジウム (帯広市、2015.6.25)
- 来嶋正朋・足利奈奈・神野裕信. 北見農試のコムギ育種における穂発芽性改良の現状(春まき). 第19回穂発芽研究会 (帯広市、2015.6.25-26)
- 其田達也・佐藤三佳子・西村 努・大西志全・粕谷雅志・神野裕信. 北見農試のコムギ育種における穂発芽性改良の現状(秋まき). 第19回穂発芽研究会 (帯広市、2015.6.25-26)
- 足利奈奈・山下陽子・来嶋正朋・藤田正平・相馬潤・小澤徹・松中仁・加藤謙司・神野裕信. 日長反応性遺伝子Ppd-D1が春まき小麦の安定多収性に及ぼす影響. 日本育種学会・日本作物学会北海道談話会報 56:10-11(2015)
- 其田達也・佐藤三佳子・西村努・菅原彰・大西志全・粕谷雅志・神野裕信. 秋まき小麦の穂発芽性“極難”系統の改良. 日本育種学会・日本作物学会北海道談話会報 56:16-17(2015)
- 粕谷雅志・鈴木孝子・神野裕信・大西志全・其田達也・吉村康弘. 「Madsen」のコムギ縮萎縮病抵

- 抗性QTLを導入した秋まき小麦「きたほなみ」の準同質遺伝子系統の農業特性. 日本育種学会・日本作物学会北海道談話会報 56:12-13 (2015)
- 神野裕信・大西志全・粕谷雅志・其田達也. 北見農試の作況調査からみた2015年の秋まき小麦多収要因. 日本育種学会・日本作物学会北海道談話会報 56:102-103 (2015)
- 浅山聡・鈴木和織・荒木和哉. 貯蔵期間と老化処理が主要農作物種子の発芽率へ及ぼす影響. 日本育種学会・日本作物学会北海道談話会報 56:110-111 (2015)
- 西村努・其田達也・佐藤三佳子・神野裕信. 登熟環境に対応した秋まき穂発芽性極難コムギの種子休眠性評価. 日本育種学会・日本作物学会北海道談話会報 56:108-109 (2015)
- 中根わかな・西村努・神野裕信・森正彦・三浦秀穂. 北系1802における強種子休眠性の遺伝解析. 日本育種学会・日本作物学会北海道談話会報 56:18-19 (2015)
- 山田翔太・笠島真也・伊藤博武・神野裕信・大西志全. 秋播性コムギ品種「きたほなみ」の多収要因に関する研究. 日本育種学会・日本作物学会北海道談話会報 56:14-15 (2015)
- Shinya Kasajima, Kota Imai, Takahiro Shimizu, Hirotake Itoh, Yasuo Nakamaru, Hozumi Yoshida, Mikako Sato, Hironobu Jinno, Yasuhiro Yoshimura and Tadashi Takahashi. High yielding ability of winter wheat based on an ideotype. 韓国作物学会秋季学術発表会 (中源大学、2015.9.23~24)
- 神野裕信. 道総研における小麦育種の現状と今後の取り組み. 第62回北海道土壌肥料懇話会シンポジウム (札幌市、2015.12.3)
- 来嶋正朋・山下陽子・足利奈奈・神野裕信. タンパク質含有率に関わる遺伝子 Gpc-B1の導入が春まきコムギの農業特性へ及ぼす影響. 日本育種学会第129回講演会 第18巻別冊1号:118(2016)
- 足利奈奈、来嶋正朋、神野裕信. CIMMYTから導入したコムギ遺伝資源の特性と多収育種への利用. 日本育種学会第129回講演会 第18巻別冊1号:37(2016)
- 其田達也・蝶野真喜子・石川吾郎・神野裕信. 北海道における軟質秋まき小麦育成系統の休眠型MFT遺伝子の頻度と種子休眠性. 日本育種学会第129回講演会 第18巻別冊1号:190(2016)
- 大西志全、神野裕信. 小麦における間接指標を使った収量性の選抜の可能性. 日本育種学会第129回講演会 第18巻別冊1号:132(2016)
- 西村努・中根わかな・神野裕信・中道浩司・森正彦・三浦秀穂. 発芽抑制遺伝子MFT-3Aがコムギの種子休眠性および農業形質に及ぼす影響. 日本育種学会第129回講演会 第18巻別冊1号:207(2016)
- 村井耕二・来嶋正朋・吉村康弘・太田宇香・石川直幸. 日長感応性細胞質雄性不稔(PCMS)コムギ系統の長日条件下における放任受粉種子稔性. 日本育種学会第129回講演会 第18巻別冊1号:34(2016)
- 山田翔太・笠島真也・伊藤博武・神野裕信・大西志全・高橋肇. 秋播性コムギ品種「きたほなみ」の多収要因に関する研究—特に乾物生産と窒素蓄積に着目して—. 日本作物学会第241回講演会要旨集:41(2016)
- 足利和紀・出口健三郎. チモシーにおける地下茎型イネ科雑草のアレロパシーに対する抵抗性の品種間差異. 北海道畜産草地学会第4回大会 (2015.9).
- 足利和紀・田中常喜. チモシーの生育における遺伝子型とシロクローバ競合および無競合条件との交互作用の評価. 北海道畜産草地学会第4回大会 (2015.9).
- 足利和紀・出口健三郎. チモシーにおける地下茎型イネ科雑草のアレロパシーに対する抵抗性の品種間差異が作溝播種による初期生育に及ぼす影響. 2016年度日本草地学会石川大会 (2016.3).
- 田中常喜・藤田涼平・鹿島聖志・大波正寿. バレイショ育種におけるBLUP法アニマルモデルの適用 1. 最適なモデルの構築. 日本育種学会第129回講演会 第18巻(別冊1) 71 (2016.3).
- 藤田涼平・鹿島聖志・田中常喜・大波正寿. バレイショ育種におけるBLUP法アニマルモデルの適用 2. 推定育種価の検証. 日本育種学会第129回講演会 第18巻(別冊1) 72 (2016.3).
- 唐 星児・大塚省吾・小野寺政行・横田 浩. オホーツク地域の秋まき小麦に対する被覆尿素肥料を用いた追肥省略技術の検討. 日本土壌肥料学会北海道支部秋季大会 (2015.12).
- 中辻敏朗・荒木英晴・広田知良. 積算寒度から推定した近年のオホーツク地域の土壌凍結深. 日本土壌肥料学会北海道支部秋季大会 (2015.12).
- 小野寺鶴将・奈良部孝. ジャガイモシロシストセンチュウ (*Globodera pallida*) の北海道におけ

- る発生確認と対応について. 日本昆虫学会第76回大会・第60回日本応用動物昆虫学会大会合同大会 (2016.3).
- 杉山 裕・池谷美奈子・柳田大介・佐々木純. タマネギ乾腐病抵抗性圃場検定法の改良. 北海道園芸研究談話会報 49:56-57(2016).
- 池谷 聡・池谷美奈子. テンサイ褐斑病の被害解析の試み. てん菜研究会第13回後術研究発表会. てん菜研究会報 56:45-47(2016).
- S.Tanaka, M.Nakano, F.Komai, D.Yanagida, M.Iritani, S.Koyano, Y.Shiga and H.Araki. Development of onion cropping types and breeding short day cultivars for early shipment in Hokkaido, Japan. The 7th international symposium on edible alliaceae. Nigde, Turkey(2015).
- 田中静幸. 第7回食用ネギ類国際シンポジウムの概況, 北海道園芸研究談話会報 49:44-45(2016).
- 田中静幸. 食用ネギ類国際シンポジウム (ISEA2015) について, 園芸学会春季大会第18回ネギ類研究小集会 (2016).
- 馬淵富美子・三宅俊秀・松井克行・浅田洋平・伊藤舞. 携帯型NDVIセンサを活用した作物管理 (第一報) —小麦茎数推定法の現地適応性—. 農業食料工学会 北海道支部北海道支部 第66 回年次大会 (2015.9)

3) 専門雑誌記事

- 中津智史. よくわかる Q & A 畑作物の葉面散布について教えてください. ニューカントリー3月号(63(3)):58-59(2016).
- 神野裕信. 北海道産小麦の特徴を活かした製パン適性評価. 製パン工業 44(10):12-18(2015)
- 中辻敏朗. 気候変動で変わる農業 「適応策」へのシフト 北海道農業への影響 —2030年代の予測と対応方向—. 環境会議 2015年秋号:116-121(2015)
- 小野寺政行. やっぱりすごい緑肥作物 主な効果と選び方. ニューカントリー9月号(62(9)):12-14(2015)
- 小野寺政行. でん粉原料用ばれいしょ「コナユキ」の安定多収栽培法. ニューカントリー3月号(63(3)):52-53(2016)
- 小野寺政行. でん粉原料用ばれいしょ「コナユキ」の安定多収栽培法. 砂糖類・でん粉情報 38:41-49(2015)
- 小野寺政行. 上手に活用しよう緑肥作物. 農家の友2月号(68(2)):104-107(2016)
- 池谷聡. 平成27年産てん菜の生産実績について. てん菜協会だより 第122号:3-5(2016).
- 三宅俊秀. 特集 平成27年度技術総括 畑作 (馬鈴しょ・てん菜). 農家の友12月号(67(12)):36-37(2015)
- 三宅俊秀. 特集 I 2016作物展望 小麦は品種特性に応じた適正施肥で品質の確保を. ニューカントリー1月号(63(1)):38-39(2016)
- 三宅俊秀. 平成27年産小麦の総括. 北海道米麦改良 第114号(2016.1)
- 三宅俊秀、千石由利子. まん延防げ「ジャガイモシロシストセンチュウ」. 農家の友1月号(68(1)):40-41(2016)
- 三宅俊秀. 高品質安定生産に向けた栽培技術. 明日の豆作り:33-38(2016.1)
- 千石由利子. 北海道の小麦づくり平成28年. 小麦の病害とその予防:123-159(2016.1)
- 千石由利子. 北海道の小麦づくり平成28年. 小麦の害虫とその予防:161-174(2016.1)
- 千石由利子. 豆類の病害虫. 明日の豆作り:110-132(2016.1)

4) 著編書、資料

- 神野裕信. 北海道の小麦づくり II 小麦品種の特性と栽培上の留意点. 平成28年度「北海道の小麦づくり」47-61(2016.2).
- 足利和紀・藤井弘毅・田中常喜. とうもろこし(サイレージ用)新品種「LG3264」. 北農 82:204(2015).
- Tsuneki Tanaka, Hiroyuki Tamaki, Kazunori Ashikaga, Hiroki Fujii, Ken-ichi Tamura, Toshihi

ko Yamada. Use of SSR markers to increase forage yield in timothy (*Phleum pratense* L.).
Molecular Breeding of Forage and Turf 131-142(2015).

- 八木亮治・地子 立・平井 剛・福川英司・木村文彦・田中静幸. メロン新品種「空知交23号」.
北農82:200 (2015).
- 馬淵富美子. ICTを活用した営農システム. 第3章 事例編 生育センサを活用した秋まき小麦
の可変施肥 ニューカントリー2015年秋季臨時増刊号 139-147(2015).
- 馬淵富美子. <特集 北海道農業における先端工学技術の活用>北海道におけるICT・スマート
農業の普及と課題. 北農 83(1):20-28 (2016.1)
- 馬淵富美子. 北海道農業入門 新規就農者向けテキスト(農業機械編) 北海道農政部 (2016.3)

5) 新聞記事

- 中山輝. シストセンチュウとそうか病に強い 加工用馬鈴しょ新品種「ぼろしり」. 農業共済新聞(2
015.8.5).
- 小野寺政行. でん粉原料用ばれいしょ「コナユキ」の安定多収栽培法. 農業共済新聞(2015.4.8)
- 池田幸子. 広告企画「秋まき小麦の病害虫防除企画」日本農業新聞 (2015.10.20).
- 千石由利子. ジャガイモシロシストセンチュウ 人為的拡散を防ごう. 農業共済新聞 (2016.2)

2 普及事項

1) 普及奨励事項

- (1) 小豆新品種「十育164号(品種名未定)」
- (2) ばれいしょ新品種「HP07(コナヒメ)」
- (3) てんさい新品種「KWS 2K314(品種名未定)」
- (4) シロクローバ新品種「AberPearl」
- (5) シロクローバ新品種「GC158」
- (6) とうもろこし(サイレージ用)新品種「P8025(X80A397)」

2) 普及推進事項

- (1) たまねぎ新品種「北見交65号(品種名未定)」
- (2) 移植たまねぎ安定生産のための窒素分施肥技術

3) 指導参考事項

- (1) たまねぎ直播栽培における収量安定化方策
- (2) *Microdochium nivale* による秋まき小麦の赤かび病と葉枯症状の防除対策
- (3) ジャガイモシストセンチュウ発生ほ場における密度推定のための省力的な土壌サンプリング法
- (4) たまねぎの灰色腐敗病に対する多発回避のための防除対策
- (5) 殺虫・殺菌剤
 - ①小麦の赤かび病(ニバーレ菌)に対するイミノクタジン酢酸塩液剤の効果
 - ②小麦の赤かび病(ニバーレ菌)に対するジエトフェンカルブ・ベノミル水和剤(未登録)の効果
 - ③小麦の赤かび病(DON濃度低減)に対するイミノクタジン酢酸塩液剤の効果
 - ④小麦の赤かび病(DON濃度低減)に対するイミノクタジン酢酸塩・チオファネートメチル水和剤F
の効果
 - ⑤小麦の赤かび病(DON濃度低減)に対するジエトフェンカルブ・ベノミル水和剤(未登録)の効
果

4) 研究参考事項

なし

3 品種登録・特許申請

- (1) メロン「おくり姫」、八木亮治・地子 立・平井 剛・福川英司・木村文彦・田中静幸・佐藤昌一・佐藤善蔵・佐藤公治、出願日－2015/06/29、出願番号－30290、出願公表日－2015/09/29

V 研究企画・場運営・広報活動

1 諸会議

会 議 名	開催時期	場 所	参 加 者
定例庁内会議	H27. 4. 8	農試会議室	場員
定例庁内会議	H27. 5. 12	農試会議室	場員
定例庁内会議	H27. 6. 10	農試会議室	場員
重点研究「土壌凍結深制御技術を応用した畑地の理化学性改善による生産性向上」現地検討会	H27. 6. 11～12	農試講堂・圃場、 訓子府町および美幌町現地圃場	場員、普及センター、関係農試、関係農業団体
定例庁内会議	H27. 7. 6	農試会議室	場員
新規課題場内検討会議	H27. 7. 3	農試講堂	場員
定例庁内会議	H27. 8. 4	農試会議室	場員
定例庁内会議	H27. 9. 4	農試会議室	場員
定例庁内会議	H27. 10. 5	農試会議室	場員
定例庁内会議	H27. 11. 4	農試会議室	場員
現地委託試験成績検討会	H27. 12. 4	訓子府町公民館	場員、普及センター、関係農試、関係農業団体等
定例庁内会議	H27. 12. 11	農試会議室	場員
成績会議場内検討会	H27. 12. 14	農試講堂	場員
定例庁内会議	H28. 1. 12	農試会議室	場員
定例庁内会議	H28. 2. 8	農試会議室	場員
設計会議場内検討会	H28. 2. 9, 10	農試講堂	場員
重点研究「土壌凍結深制御技術を応用した畑地の理化学性改善による生産性向上」成績検討会	H28. 2. 15	訓子府町公民館お よび町内現地圃場	場員、普及センター、関係農試、関係農業団体
定例庁内会議	H28. 3. 2	農試会議室	場員
現地委託試験設計検討会	H28. 3. 28	農試講堂	場員、普及センター、関係農試、関係農業団体等

2 各種委員会

1) ほ場管理・施設等整備委員会

(1) 構成

委員 長：中津研究部長

事務局 長：浅山 聡(ほ場管理)、村山 敏(施設等整備)

委 員：佐々木 賢(中村誠志)、三浦和利、神野裕信、大波正寿、藤井弘毅、小野寺政行、
小野寺鶴将、萩原誠司、奥山昌隆

(2) 活動内容

① 委員会の開催

第1回：平成27年5月21日

1) 平成28年度施設整備等補助事業の予算要望調査について

第2回：平成28年1月26日

- 1) 平成28年度試験研究用備品の予算要望について
- 2) 施設等点検を踏まえた保全状況報告について
- 3) 平成28年度以降のほ場の輪作体系について
- 4) 庁舎正面玄関付近に設置している水道の使用中止について

2) 業務委員会

(1) 構成

委員長：浅山 聡

委員：伊藤幸雄、池谷 聡、藤田涼平、大西志全、田中常喜、唐 星児、池谷美奈子

(2) 活動内容

① 第1回委員会：平成27年4月16日

- 1) 業務委員会開催要領
- 2) 麦類G（管理）業務体制
- 3) 室外契約職員体制
- 4) 月間作業予定
- 5) 週間作業予定
- 6) 作付計画
- 7) 4月下旬の作業予定

② 定例委員会：4月23日から10月22日まで原則として毎週木曜日に開催した。

- 1) 機械作業など週間作業計画および貨物車両使用計画
- 2) 室外契約職員週間作業計画

③ 第1回臨時委員会：平成28年1月14日

- 1) 室外契約職員の雇用計画

④ 第2回臨時委員会：平成28年3月17日

- 1) 室外契約職員の応募状況、面接方法

3) 図書・広報委員会

(1) 構成

委員長：中辻敏朗

委員：立山裕之、粕谷雅志（図書連絡委員兼務）、藤井弘毅、木場稔信、奥山昌隆

(2) 活動内容

① 第1回委員会：平成27年4月15日

- 1) 図書連絡委員の選任
- 2) 今年度業務内容の確認

② 新資料保管庫への図書移動：平成27年5月28日、6月2日、6月3日、

図書委員および場員により若葉空き公宅から移動（延べ21名、延べ6時間、段ボール550箱）

③ 移動した図書の書架への整理：平成27年6月8日

室外契約職員の出役により整理（延べ10名、延べ5時間）

④ 第2回委員会：平成27年11月16日

平成28年度定期刊行物購入計画の策定

⑤ 新着図書の案内、刊行物の配布、蔵書調査に対する回答等は随時実施

4) システム委員会

(1) 構成

委員長：中辻敏朗

委員：稲村浩至、其田達也（システム管理者兼務）、中山 輝、唐 星児、杉山 裕

(2) 活動内容

① 第1回委員会：平成27年4月14日

- 1) システム管理者の選任
- 2) 業務分担の確定
- 3) 北見農試ホームページの更新について
- 4) 場内LANDISK管理について

② 定期作況報告および入札情報ページの更新操作マニュアルver.1の作成（稲村主任作成，平成28年1月）。

③ ホームページの更新：19回実施

5) バイテック共同実験室利用委員会

(1) 構成

委員長：田中静幸

委員：中山利彦、来嶋正朋、足利和紀、小野寺鶴将、田中静幸（兼任）

(2) 活動内容

① 第1回委員会：平成27年5月1日

- 1) 本年度の委員について
- 2) インキュベータ（リース）の設置場所について

6) 定期作況報告委員会

(1) 構成

委員長：中津智史

事務局長：富田謙一

気象担当：中辻敏朗

とりまとめ：萩原誠司

委員：粕谷雅志、足利奈奈、青山 聡、池谷 聡、萩原誠司、足利和紀、田中常喜、杉山 裕

(2) 活動内容

① 第1回委員会：平成27年4月15日

- 1) 定期作況報告の実施体制
- 2) 年間日程
- 3) 具体的作業日程と該当作物
- 4) 最終作況の判定基準

7) 公開デー実行委員会

(1) 構成

委員長：中津智史

事務局：村山 敏、中辻敏朗

委員：樫村 優、足利奈奈、青山 聡、足利和紀、木場稔信、小野寺鶴将、萩原誠司、奥山昌隆、千石由利子

(2) 活動内容

① 第1回委員会：平成27年4月22日

- 1) 実施方針について
- 2) イベント内容と班編制およびリーダーについて
- 3) 試食・クイズラリー景品用の馬鈴しょとたまねぎ作付について
- 4) 今後の進め方について
- ② 第2回委員会：平成27年5月25日
 - 1) 各イベントへの職員配置について
 - 2) イベント企画案について（たたき台の提示）
 - 3) 物品購入，契約職員の必要人数，机・椅子の必要数について
- ③ 第3回委員会：平成27年6月26日
 - 1) イベント準備の進捗状況報告
 - 2) 購入物品のとりまとめ結果について
 - 3) ポスター案の検討
 - 4) 今後の作業スケジュールについて
- ④ 第4回実行委員会：平成27年7月31日
 - 1) イベント準備の進捗状況最終報告
 - 2) 前日から当日の流れについて
 - 3) 当日の配布チラシについて
- ⑤ 第5回実行委員会：平成27年10月26日
 - 1) 開催結果の概要報告
 - 2) 来場者アンケート集計結果の報告
 - 3) 公開デーに係る場員からの意見・反省点・改善方向への対応について
 - 4) 来年度の開催日について（後日の庁内会議での承認により平成28年8月10日に決定）
 - 5) 各イベント実施手順等の引き継ぎについて

8) オホーツク圏農業新技術セミナー実行委員会

(1) 構成

委員長：田中静幸

事務局：村山 敏、浅山 聡、富田謙一、中辻敏朗

実行委員：其田達也、中山 輝、田中常喜、唐 星児、池田幸子、萩原誠司

(2) 活動内容

- ① 第1回実行委員会：平成27年1月7日
 - 1) 準備経過確認（10月5日、12月11日庁内会議提案）
 - 2) 口頭発表課題の確認およびパネル展示候補課題の選定（案）
 - 3) 開催案内チラシの作成について
 - 4) 要旨原稿集約・編集担当の選定
 - 5) パネル集約担当の選定
 - 6) 口頭発表データ集約・編集担当の選定
 - 7) 広報および場内対応について確認
 - 8) その他準備
- ② 発表課題検討：平成28年1月28日

出席者：竹中秀行、中津智史、田中静幸

口頭発表、パネル発表課題タイトルの決定
- ③ 北見市端野町公民館との打ち合わせ：
 - 1) 平成27年9月29日 会場仮予約（3月1日）田中静幸

3) 平成28年2月22日

出席者：田中静幸、奥山昌隆
会場設備、当日進行等の確認

④ 口頭発表リハーサル：平成27年2月23、25日

口頭発表担当者：藤田涼平、池谷美奈子、萩原誠司、池谷 聡、杉山 裕、木村 篤（網走農業改良普及センター美幌支所）

⑤ 開催可否について打ち合わせ：平成28年3月1日

出席者：竹中秀行、中津智史、村山 敏

悪天候予報のため、開催可否について検討し、中止を決定した。なお、悪天候による開催中止は2年連続となる。

9) その他委員会

(1) 安全衛生に係る意見交換会：平成28年2月8日

① 出席者 竹中秀行（管理責任者）、村山 敏（衛生推進者）、中山利彦（安全衛生担当者）
富田謙一（支部長）、奥山昌隆（書記長）、
浅山 聡、青山 聡、中辻敏朗、田中静幸、立山裕之

② 活動内容

平成27年度に実施した安全衛生関係の事業について説明

健康診断、労務災害、農作業安全、労働安全確保対策、環境測定結果、防火訓練、交通安全講習会、夏期・冬期休暇の取得状況、その他

組合および各グループ等からの要望

弥生公宅の防風林の管理・伐採について

廊下・室内タイルのはがれについて

庁舎屋根雪下ろしの安全対策について

(2) 公宅入居委員会：平成28年3月16日

① 出席者 村山 敏（場長指定）、富田謙一（支部長）、奥山昌隆（書記長）
萩原誠司（弥生町内会）、其田達也（若葉町内会）、中山利彦（事務局）

② 活動内容

平成28年4月1日付け人事異動による公宅入居希望者の決定、

公宅管理を行っているオホーツク総合振興局総務課へ報告

3 刊行印刷物

印刷物名	発行年月	頁	部数
平成25年度 秋まき小麦育成試験成績書	27. 4	150	90
北海道立北見農業試験場年報（平成26年度）	27. 7	82	250
オホーツク農業新技術セミナー発表要旨集	28. 2	34	250
「移植たまねぎ安定生産のための窒素分施肥技術」成績会議資料	28. 1	35	250
「たまねぎの灰色腐敗病に対する多発回避のための効率的防除対策」成績会議資料	28. 1	27	160
飼料作物の育種に関する試験成績書	28. 3	70	80
平成23年度 春まき小麦育種試験成績書	28. 3	101	90
平成26年度 秋まき小麦育成試験成績書	28. 3	151	80

4 広報活動

1) シンポジウム・セミナー等

名 称	開催日	場 所	内 容	参加者
小麦で、オホーツク る！ ミーティング2 015～ オホーツク産 小麦普及セミナー ～	H27. 11. 11	ブラザホテル (北見市)	パネルディスカッション「オホーツク小麦の明日を描いてみよう」 神野裕信 (北見農試)	50名
ICTを活用した酪農 技術セミナー	H27. 11. 26	湧別町文 化センタ ーさざ波	1) オホーツク酪農の将来デザイン」－先進技術普及の道程－ 竹中秀行 (北見農試) 2) オホーツク管内における飼料作・コントラ、TMRセンターの現状と課題 太田 浩太郎 (網走農改) 3) 遠紋地域における飼料用とうもろこし畑の生産阻害要因と土壌・肥培管理法 小野寺政行 (北見農試) 4) 牧草育種の動向と地域にあった栽培技術 藤井弘毅 (北見農試) 5) 「搾乳ロボットを使いこなす」 岡田直樹 (中央農試)	128名

2) マスコミ、広報誌等による報道

タ イ ト ル	報 道 機 関	掲 載・放 送 日
たまねぎ新品種「北見交65号」について	日本農業新聞	H28. 3. 23
てんさい新品種「KWS 2K314」について	日本農業新聞	H28. 3. 19

3) 展示会等への出展、公開デー

(1) 北見農試公開デー2015

日時：平成27年8月6日 9時30分～13時（受付は12時30分まで）

場所：場内

天候：雨のち曇り（雨は午前10時まで14mm，最高気温23.1℃）

来場者：194名（うち子供49名）

行事内容：クイズラリー（会場内7か所に各研究室出題のクイズ設置）、研究成果展示（新品種、栽培技術などのパネル展示、作物の展示）、畑作園芸相談コーナー（栽培法、肥料、病気、害虫などの技術相談、資料展示）、ほ場見学バスツアー（車中から見学、3回運行）、畑で働く農業機械展（4機種を展示）、試食コーナー（バターロール、ポテトチップ、ふかしいも、冷やし汁粉を提供）、おもしろ体験コーナー（どれが甘いかな、スーパーボールすくい、わなげ）、町内生産者グループによる地場産野菜等の販売。

(2) オホーツク小麦フェスタ2016 in あばしり

日時：平成28年2月14日（日）

場所：オホーツク・文化交流センター（網走市）

主催：公益財団法人オホーツク地域振興機構、網走市

内容：小麦品種「きたほなみ」、「はるきらり」、「つるきち」等の紹介。パネル展示、チラシ配布。

5 見学受入れ

年月日	団 体 名	人 数
H27. 3. 24	北海道別海農業高等学校農業特別専攻科	14
H27. 4. 22	(株)丹波屋肥料部	15
H27. 6. 2	三井物産アグロビジネス株式会社	1
H27. 5. 26	(公財)日本特産農作物種苗協会 網走特産種苗センター	8
H27. 6. 17	訓子府町農林商工課	4
H27. 6. 17	J Aオホーツク網走 西部地区種子馬鈴薯耕作組合	18
H27. 6. 22	音更町農協 鎮鍊農事組合	5
H27. 6. 26	士幌町農協加工用玉葱生産者	6
H27. 6. 22	佐呂間町農協 麦耕作生産者協議会	10
H27. 6. 2	道産小麦研究会	5
H27. 6. 2	小清水町種馬鈴しょ採種組合	25
H27. 6. 1	北見地区農村ゼミナール	20
H27. 6. 8	駿農人育成セミナー	9
H27. 6. 16	日本甜菜製糖株式会社 美幌製糖所	18
H27. 7. 16	ホクレン肥料株式会社 北見工場	13
H27. 7. 27	きたみらい農業協同組合	50
H27. 8. 4	斜里町農民同盟	23
H27. 9. 4	ツクイ北見常盤 (デイサービス)	27
H27. 9. 4	ツクイ北見常盤 (デイサービス)	26
H27. 9. 4	ツクイ北見常盤 (デイサービス)	23
H27. 7. 23	魚沼みなみ農業協同組合 常勤監事	7
H27. 9. 24	北見通運株式会社 営業部他	6
H27. 9. 16	遠軽町経済部農政林務課	5
H27. 10. 9	北海道大学大学院農学研究院 作物学研究室	10
H27. 11. 5	東京農業大学 木村俊昭教授	4
H28. 2. 1	清里町農民連盟	21

VI 技術指導および研修

1 研修生の受入れ

研修項目	団体・人数	研修期間	対応グループ
高度専門技術研修（畑作）	空知農業改良普及センター本所（1名） 後志農業改良普及センター本所（1名）	H27. 6. 23 ～6. 26	麦類G 作物育種G 生産環境G 地域技術G 技術普及室

2 講師派遣

研修会および講習会	主催者	開催日	演題	派遣者
栽培技術講習会	きたみらい馬鈴しよ振興会	H27. 4. 2	土壌分析について	小野寺政行
中斜里製糖工場区域内畑作研究センター試験方案会議_研修会	中斜里製糖工場区域内畑作農業研究センター運営協議会	H27. 4. 22	てん菜の西部萎黄病対策について	池谷美奈子
北見施肥防除合理化推進連絡協議会_防除技術講演会	北見施肥防除合理化推進連絡協議会	H27. 4. 23	てん菜の西部萎黄病対策について	池谷美奈子
土壌水分把握に向けた研修会	JAきたみらい気象変動に負けない農業確立プロジェクト	H27. 5. 13	触診による土壌水分の把握とかん水指針	中辻敏朗
オホーツク総合振興局種子審査員研修会	オホーツク総合振興局	H27. 6. 17	品種の形態的特性、異形判別のポイント	浅山 聡
JA清里町馬鈴しよ採種組合連合会講習会	JA清里町	H27. 6. 25	ばれいしよ「コナユタカ」の栽培と防除	大波正寿
平成27年度土づくり現地研修会	北海道農協「土づくり」運動推進本部	H27. 7. 7	高品質畑作物安定生産のための土づくりと土壌管理	中辻敏朗
オホーツクJA営農指導員技術研修	JA北海道中央会北見支所	H27. 7. 8	土壌pHの測定法	中辻敏朗
オホーツクJA営農指導員技術研修	JA北海道中央会北見支所	H27. 7. 8	農薬・病害虫防除の基礎知識	千石由利子
土壌断面調査法研修会	JAきたみらい気象変動に負けない農業確立プロジェクト	H27. 7. 21	土壌断面調査の実際	中辻敏朗 小野寺政行
オホーツクJA営農指導員技術研修	JA北海道中央会北見支所	H27. 9. 15	GPS・GISの基礎知識	馬淵富美子
サイレージ用とうもろこし研修会	留萌農業改良普及センター北留萌支所	H27. 10. 22	重粘土地帯における飼料用とうもろこし畑の生産阻害要因と土壌・肥培管理法	小野寺政行

研修会および講習会	主催者	開催日	演題	派遣者
宗谷農業改良普及センター 職場研修	宗谷農業改良普及 センター	H27. 10. 23	重粘土地帯における飼料用とうもろこし畑の生産阻害要因と土壌・肥培管理法	小野寺政行
ICTを活用した酪農技術セミナー	オホーツク総合振興局	H27. 11. 26	遠紋地域における飼料用とうもろこし畑の土壌・肥培管理法	小野寺政行
暮らしにせまる気候変動の脅威	NPO法人北海道グリーンファンド	H27. 12. 19	温暖化は北海道の農作物にどう影響するか	中辻敏朗
平成27年度ばれいしょ・てん菜施肥防除技術セミナー	ホクレン	H28. 1. 14	てん菜の肥培管理	小野寺政行
豆作り講習会	日本豆類協会	H28. 2. 3	豆類において注意を要する病害虫	小野寺鶴将
馬鈴しょ栽培講習会	J Aきたみらい	H28. 2. 3	「さやか」の品種特性と褐色心腐の原因と対策、「ナストビハムシ」の生態と防除方法	中山輝
小清水町農民連盟研修会	小清水町農民連盟	H28. 2. 17	ジャガイモシロシストセンチュウの発生と対応について	小野寺鶴将
平成27年度良質米麦生産技術講習会（オホーツク）	北海道米麦改良協会	H28. 2. 18	麦作・・・	三宅 俊秀
J Aこしみず畑作技術講習会	J Aこしみず	H28. 2. 26	今年の病害虫対策について	千石由利子
2016北海道クリーン農業セミナー	北海道クリーン農業推進協議会	H28. 3. 9	ばれいしょ「コナユタカ・コナヒメ」の栽培技術 移植たまねぎ安定生産のための窒素分施肥技術	大波正寿 小野寺政行

3 職員研修

氏名	研修項目	場所	期間
伊藤幸雄	伐木等業務安全衛生特別教育	林業木材製造業労働災害防止協会	H27. 4. 16～H27. 4. 17
檜村 優	〃	〃	〃
檜村 優	刈払い機取扱作業安全衛生教育	〃	H27. 4. 18
井口岳人	危険物取扱者乙種4類事前講習	北海道危険物安全協会連合会	H27. 4. 22～H27. 4. 23
檜村 優	新規採用職員研修	北海道総合研究プラザ	H27. 4. 22～H27. 4. 25
檜村 優	車輛系建設機械運転技能講習	芽室自動車学校北見教習センター	H27. 4. 27～H27. 4. 28
檜村 優	玉掛技能講習	芽室自動車学校北見教習センター	H27. 5. 18～H27. 5. 20
田中静幸	海外研修「国際シンポジウム参加によるタマネギ育種、栽培研究の最新情報入手と国際的人脈形成」	トルコ共和国ニード市	H27. 5. 19～28
井口岳人	危険物取扱者乙種4類試験	北海道危険物安全協会連合会	H27. 5. 31
檜村 優	天井クレーン等5トン未満特別教育	芽室自動車学校北見教習センター	H27. 6. 19～H27. 6. 20
浅山 聡	新任研究主幹級研修	北海道総合研究プラザ	H27. 7. 30～H27. 7. 31

氏名	研修項目	場所	期間
中山 輝	採用3年目職員研修	建築研究本部 北方建築総合研究所	H27. 10. 15～16
粕谷 雅志	新任研究主任級研修	北海道総合研究プラザ	H27. 11. 11～H27. 11. 14
檜村 優	アーク溶接特別教育	(株)北友商会	H27. 11. 18～H27. 11. 19
檜村 優	ガス溶接技能講習	(株)北友商会	H27. 12. 17～H27. 12. 18
伊藤幸雄	丸鋸等取扱作業従事者教育	建設業労働災害防止協会	H28. 2. 9
井口岳人	〃	〃	〃
檜村 優	〃	〃	〃
井口岳人	自由研削用砥石の取替特別教育	北見地域職業訓練センター運	H28. 3. 28
檜村 優	〃	営協会	〃

4 職場研修

研修会および講習会	講師	開催日
農作業安全に関する職場研修	場長 竹中秀行	H27. 5. 1
海外研修報告会	地域技術G 研究主幹 田中静幸	H27. 6. 29
交通安全研修	総務課長 村山 敏	H27. 7. 6
競争的資金等不正防止研修	研究部長 中津智史	H27. 8. 4
情報セキュリティ研修	法人本部作成の研修動画	H27. 9. 25
博士号取得講演	生産環境G 研究主査 池田幸子	H27. 10. 5
法令遵守伝達研修	総務課長 村山 敏	H27. 12. 11
交通安全研修	総務課長 村山 敏	H28. 1. 6
海外視察報告会	場長 竹中秀行	H28. 1. 15
	生産環境G 主査 小野寺鶴将	
研究支援職員配置職場説明会	場長 竹中秀行	H28. 3. 29

5 国際交流

交流事業名	派遣内容	派遣職員	期間
該当無し			

Ⅶ その他

1 技術体系化チーム

- (1) 道産小麦の需要を拡大する次世代品種の開発促進と生産安定化
(4) 硬質秋まき小麦「つるきち」の生育特性に対応した栽培法の確立
チーム: 中辻敏朗、○唐 星児、奥山昌隆 (○は課題取りまとめ責任者)
施肥試験設置地区: 北見市常呂、美幌町、大空町女満別
関係機関: 網走農業改良普及センター (本所、美幌支所)

2 オホーツク地域農業支援会議プロジェクトチーム (技術普及室・研究部)

オホーツク地域農業支援会議プロジェクトチームとしての取組はなかった。

3 表彰・受賞

- (1) 日本育種学・日本作物学会北海道談話会平成27年度年次講演会 若手優秀発表賞
「日長反応性遺伝子Ppd-D1が春まき小麦の安定多収性に及ぼす影響」(平成27年12月5日)
足利奈奈
- (2) 2015年度日本作物学会論文賞 (第13回)
「アズキ極晩生遺伝資源の開花着莢障害耐冷性評価法の開発」(平成28年3月28日)
青山聡・島田尚典

4 行事

月 日	行 事 名	月 日	行 事 名
4月 3日	辞令交付式（新規採用）	12月 4日	オホーツク現地試験成績検討会
17日	オホーツク鳥インフル警戒本部幹事会	10日	オホーツク地域農業気象連絡協議会
23日	北見工業大学社会連携推進センター 推進協議会	11日	職場研究（法令遵守）
5月 1日	職場研修（農作業安全）	14日	場内成績検討会議
6月11日	研究本部長・場長会議	1月 6日	職場研修（交通安全）
12日	農研本部場長会議	18-22日	北海道農業試験会議成績会議
15日	見学案内リハーサル	21日	農研本部場長会議
16日	オホーツクIT・ロボット農業実践セミナー	2月 8日	安全衛生に関する意見交換会
23-26日	高度専門技術研修（畑作）	9-10日	場内設計会議
7月 3日	場内新規課題検討会議	17日	NATEC総会・研究交流会
9-10日	新規課題検討会議（畜産部会）	18日	農業新技術発表会（全道版）
14-17日	新規課題検討会議	19日	設計会議 てん菜分科会
27日	オホーツク地域農業気象連絡協議会	25日	農業改良普及事業懇談会
31日	オホーツク地域農業支援会議	3月 1日	オホーツク農業新技術セミナー（中止）
8月 6日	北見農業試験場公開デー	7-11日	北海道農業試験会議設計会議
10-11日	道総研丹保理事長来場	16日	オホーツク地域農業気象連絡協議会
12日	知的財産規程類説明会	16日	オホーツク地域農業支援会議
31日	設計会議 秋まき小麦分科会	16日	研究本部長・場長会議
9月10-11日	NATEC研究情報交換会・現地視察（北見市・訓子府町内）	17日	北海道農業試験研究推進会議本会議
10月 2日	オホーツク鳥インフル警戒本部幹事会	18日	農研本部場長会議
9日	農研本部場長会議	28日	オホーツク管内現地試験設計検討会
20日	北見工大産学官連携推進会議	29日	研究支援職員の配置に関する職場説明会
23日	防火訓練・AED研修	31日	辞令交付式・発令通知式（退職・異動）
28日	期中監事監査・内部監査		
30日	健康診断		
11月11日	農研本部場長会議		
18日	てん菜輸入品種検定試験及び育成系統 連絡試験成績検討会		
19日	馬鈴しょ輸入品種選定等受託試験及び 育成系統連絡試験成績検討会		
20日	道産小麦品質向上プロジェクト成績検 討会		
25日	花・野菜部会成績事前検討会		
26日	I C Tを活用した酪農技術セミナー		

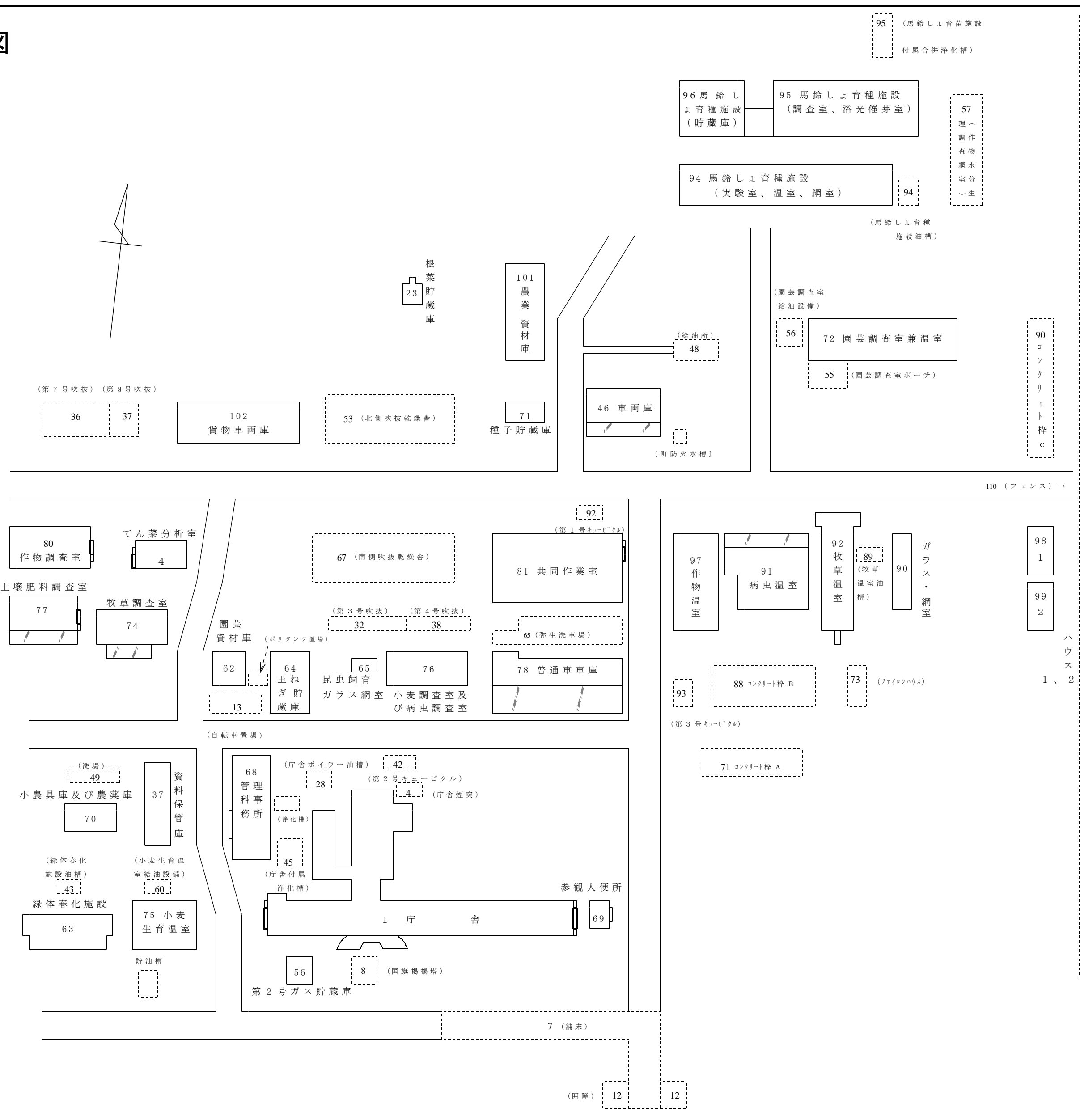
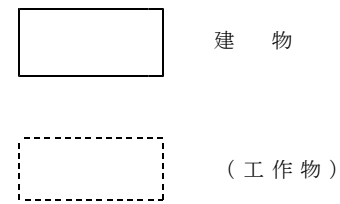
5 自己点検への対応

事 項	H22	H23	H24	H25	H26	H27
研究成果発表会の開催件数	1	1	1	2	0	2
研究成果発表会への延べ参加人数	176	234	189	247	0	496
研究会等の開催件数	0	2	2	4	0	0
研究会等への延べ参加人数	0	338	319	650	0	0
発表会・展示会等への出展件数	5	4	8	1	0	2
研究報告書の発行状況	—	—	7	6	4	4
技術資料の発行状況	—	—	2	1	1	1
学会やシンポジウム等での発表件数	18	28	39	47	24	36
学術誌や専門誌への投稿論文数	9	14	13	18	17	10
普及組織との連絡会議等開催件数	2	0	12	40	59	9
技術相談件数	80	58	70	88	43	66
技術指導件数	126	214	178	175	148	78
研究成果の公表・活用状況（雑誌）	—	—	26	32	16	15
研究成果の公表・活用状況（書籍）	—	—	11	1	6	1
研究成果の公表・活用状況（新聞）	—	—	6	4	8	2
技術審査件数	1	1	1	2	1	1
依頼試験実施件数	0	0	0	0	0	0
試験機器等の設備の提供件数	8	9	0	0	0	0
利用者意見把握調査の回答数	0	135	116	182	48	94
研修会・講習会等の開催件数	0	1	0	2	14	0
研修会・講習会等の延べ参加者数	0	7	0	11+?	1,200	0
研修者の延べ受入人数	4	4	5	16	10	2
特許等の出願件数	1	1	2	1	0	0
公開デー等の開催件数	1	1	1	1	1	1
視察者・見学者の受入件数	40	36	45	61	33	26
視察者・見学者の延べ人数	776	650	668	855	512	371
学会等役員・委員等件数	5	7	6	11	12	14
国際協力事業等への協力件数	2	2	0	0	0	0
道関係部との連絡会議等の開催件数	1	7	29	21	25	37
市町村からの研究ニーズ把握件数	8	1	—	—	—	—
市町村との意見交換等の開催件数	2	2	4	13	3	16
外部機関等との人材交流件数	0	0	0	0	0	0
国内研修Ⅱ（大学等）の派遣件数	0	0	0	0	0	0
国内研修Ⅱ（研究機関等）の派遣件数	0	0	0	0	0	0
国内研修Ⅱ（企業等）の派遣件数	0	0	0	0	0	0
国内研修Ⅱ（学会等）の派遣件数	5	3	6	7	6	6
国内研修Ⅱ（シンポジウム等）の派遣件数	3	4	0	0	0	0
企業等への訪問件数	17	31	44	35	20	18
関係団体等との意見交換等の開催件数	11	12	25	29	25	38

平成27年度の詳細な内容については、場共有フォルダ¥¥LANDISK_2013¥disk¥回覧文書¥」として格納。

6 北見農業試験場建物配置図

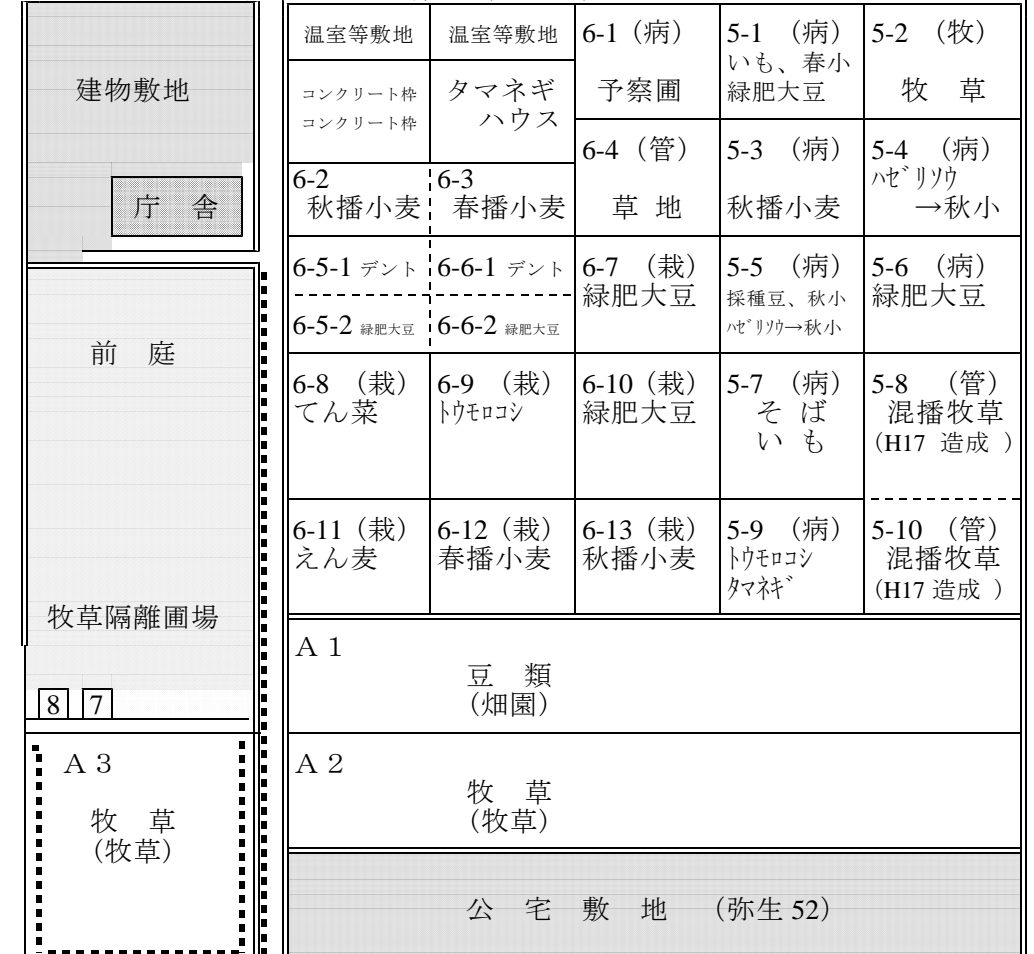
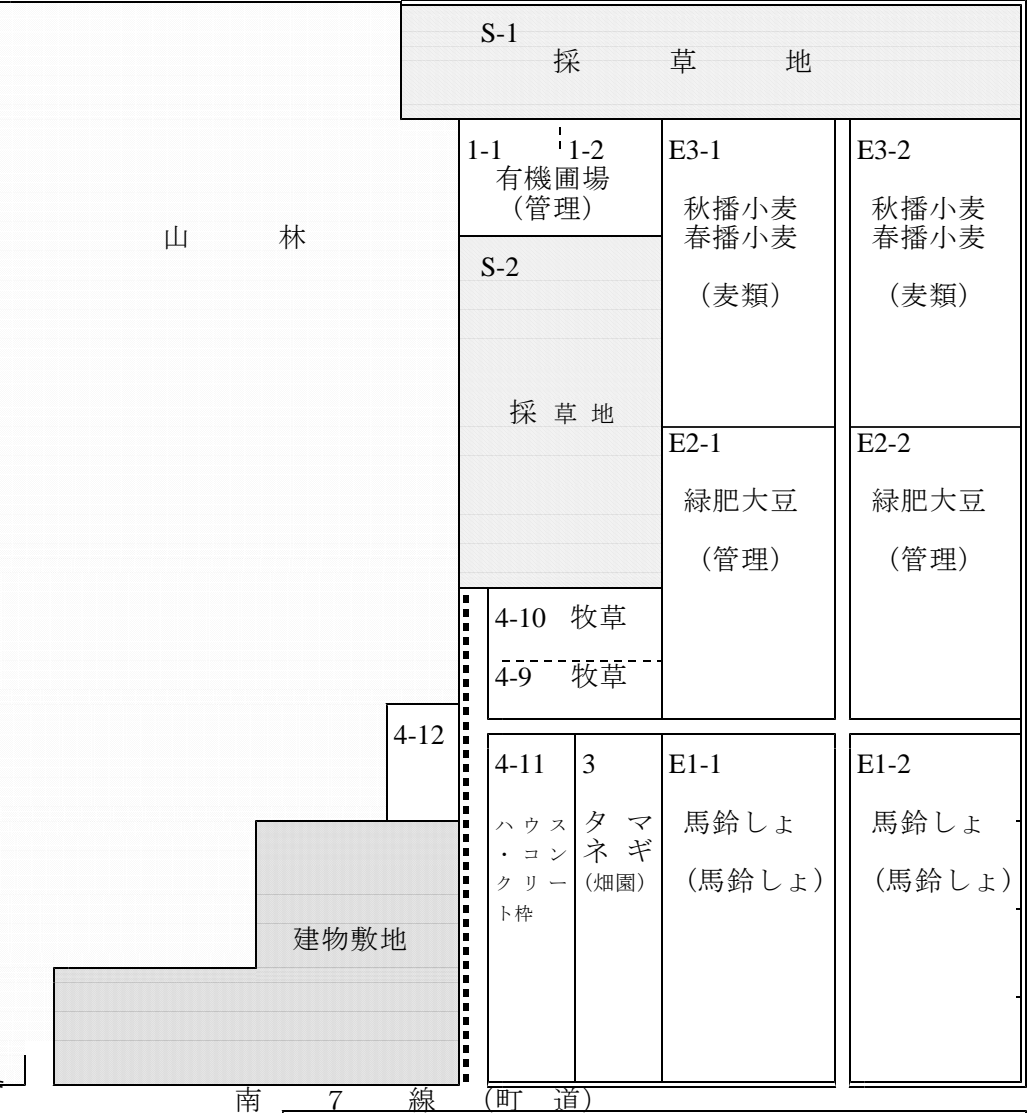
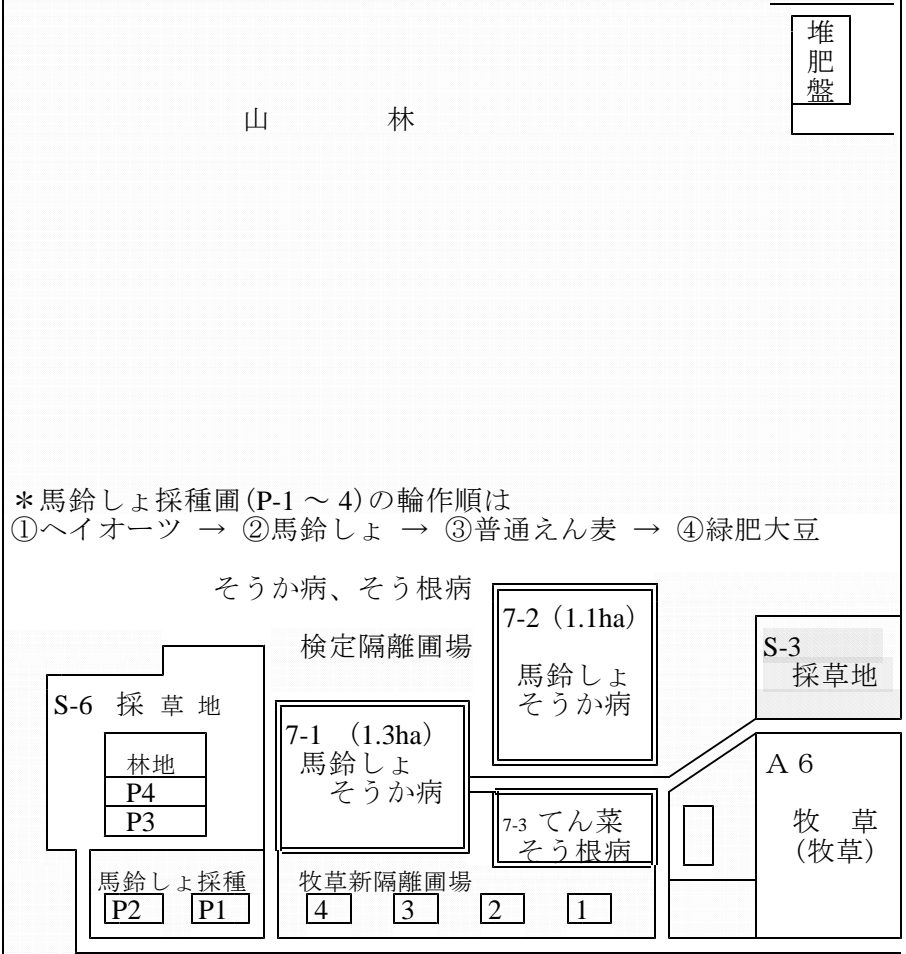
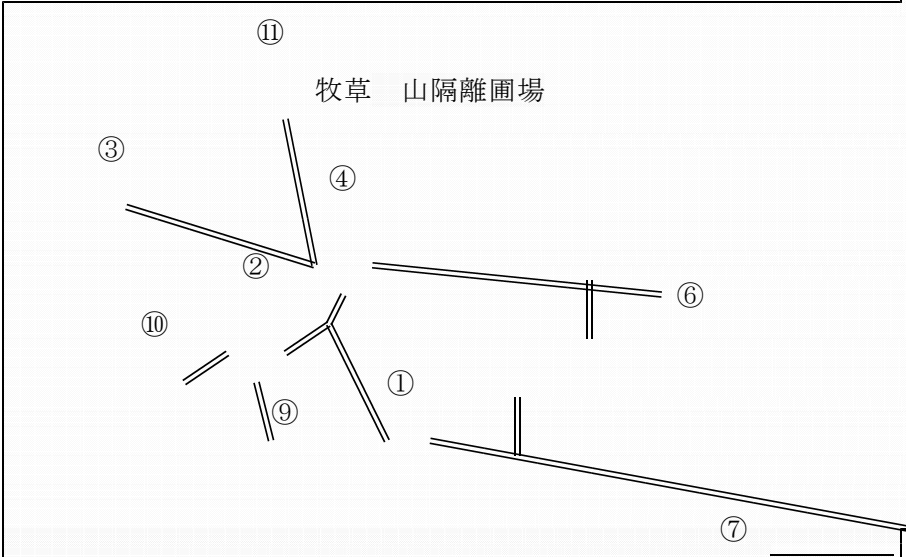
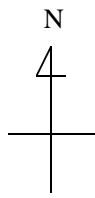
土地の所在 常呂郡訓子府町字弥生52番地



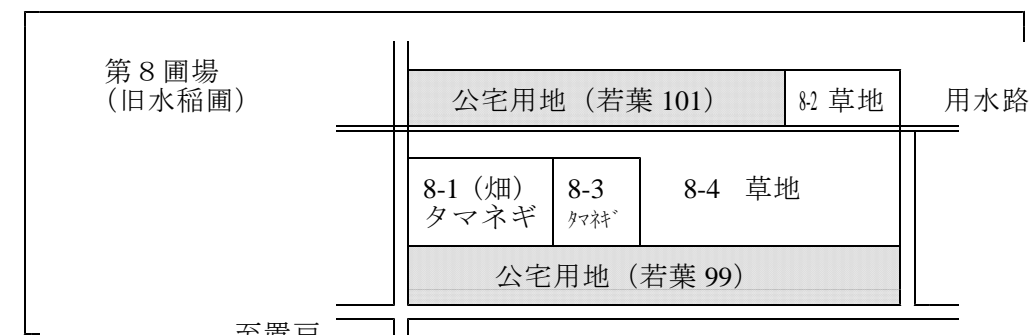
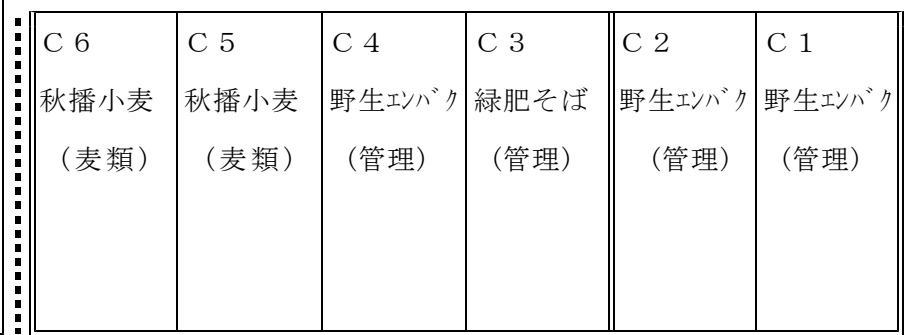
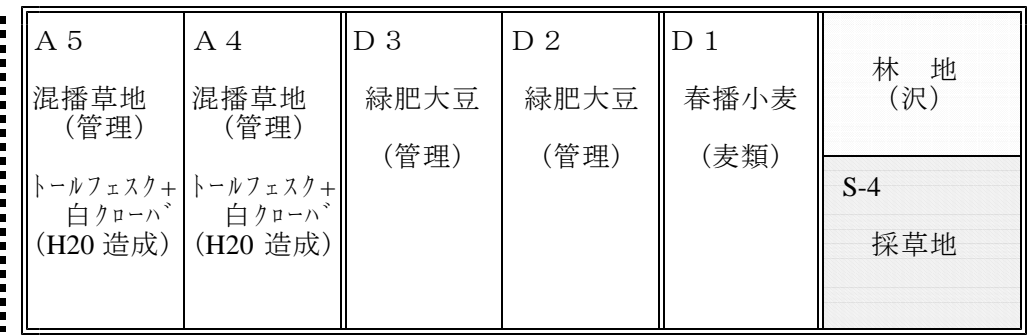
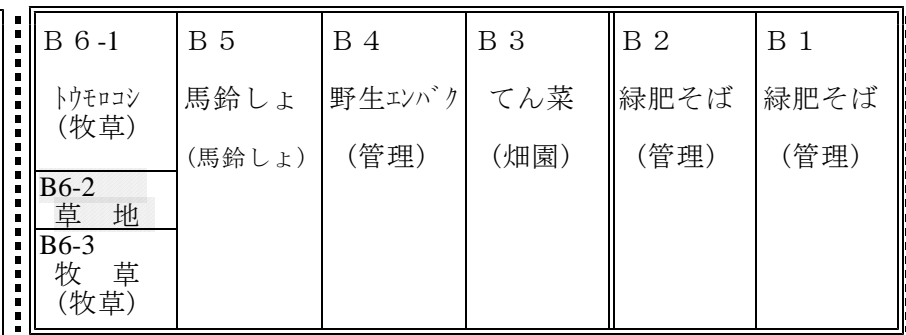
110 (フェンス) →

7 平成27年度圃場配置図

H27.4.30 作成
業務委員会事務局



至置戸 南 8 線 (道 道) 正門 至北見



至置戸 旧ふるさと銀河線 至北見

北海道立総合研究機構 北見農業試験場年報 平成27年度

平成28年7月発行

地方独立行政法人 北海道立総合研究機構
農業研究本部 北見農業試験場

〒099-1496 北海道常呂郡訓子府町字弥生52番地

電話(代表) (0157) 47-2146

ファックス (0157) 47-2774

HPアドレス <http://www.hro.or.jp/list/agricultural/research/kitami/index.html>
